

# Analecta Indica

松 村 恒

説話の流伝を考える上でユダヤの貢献を無視することはできないが、今日まで語学力の貧困さのためと、資料を閲覧する努力を怠っていたので、インドと西洋の間が欠落していて、いつも情けない思いをしていた。幸いにも平成17年度は大妻学院からスタディリーヴを許可され、その前半はSOASに籍を置いてその図書館に毎日出入りする機会に恵まれた（ロンドン大学内の他図書館、大英図書館も随時訪れた）。本来の仕事の合間にその方面の書架も覗いてみると、見るべくして見ずにいたビン・ゴリオンやギンズバーグの膨大な集成本もあり、これまでどうして勉強しなかったのかと悔やむこと頻りであった（それでもこれまで我が国では全く無視されていたベレキア・ハ・ナクダンの寓話集のヘブライ語からの和訳は秘かに計画し、毎日就寝前の数分を利用して一日一話を励行している）。それとは別にこれまで論究した説話で、そのパラレルとしてユダヤのものを抜かしたことの補いをここで雑録風に果たして（その他のことからも備忘用に込めてあるが）、リーヴ中の主目的は別途発表のこととし、ここでは副産物の一端の報告ともしたい<sup>(1)</sup>。当然のことながら、この機会を恵んで下さった大妻学院と受け入れのSOAS（個人名を挙げれば Ulrich Pagel 博士）への謝辞は欠かすことができない。

## XXXVII. エヴリマン類話補足

中世英国道徳劇『万人』の東洋の材源として、梵語の対応物を指摘し、<sup>(2)</sup>その後ヘーマチャンドラのものについては、後代インドに逆輸入されるに到ったと考えを改めるに到った<sup>(3)</sup>。いずれの場合にもユダヤの伝承を参照すべくして怠っていた。筆者自身の能力と研究環境からして致し方ない面もあったが、このたびビン・ゴリオンの集成本を閲覧する機会を得、ここに類話が収録されていることを確認したので、備忘用に記録しておきたい。ビン・ゴリオンの集成本というのはM.J. bin Gorion, *Der Born Judas: Legenden, Märchen und Erzählungen*, 6 Bde. (Leipzig, 1918-23)が淵源であり、そのヘブライ語版がエルサレムで1952年（第2版？）にでていものである。今回はそのいずれをも参照できず、実見したのはそれをエマヌエル・ビン・ゴリオンが再編集した英語版である。

*Mimekor Yisrael*<sup>(4)</sup>: *Classical Jewish Folktales*, collected by Micha Joseph bin Gorion, ed. by Emanuel bin Gorion, trans. by I.M. Lask, intr. by Dan Ben-Amos, 3 vols. Bloomington: Indiana U. P., 1976.

この Oriental Tales の Enigmas & Fables というセクションに関するものがありそうであるが、はたして第3巻の1322頁以下に「三人の友の寓話」の複数のヴァージョンが与えられている。筆者が何度か言及したエヴリマンの平行である。英語からではあるが、これまで落としていたことの罪滅ぼしの意味合いで以下に訳出しておこう。

== \* \* = = \* \* = = \* \* ==

## 36 三人の友の寓話

### 第一伝承

これに関連して賢者は次の寓話を語った。

この世は三人の友を持っている人に似ている。三人のうちのひとりはとても親密で、昼も夜も互いに離れない程であった。二番目の友も大いに好意を寄せてくれているが、最初の友程ではなかった。三番目はちょっとは仲がいいが、時折会う程度であった。

王が呼び出しを掛けることがあり、その人はとても怖れおののいた。王の力の前ではどうしようもないので恐かった。彼は第一の友に相談に行き言った。

「王様が呼び出しを掛けてきましたが、私はとても恐いので、あなたの助力が欲しい。私と一緒に王様のところへ行ってくれませんか」第一の友は付いて行く気は全然ないと答えました。彼は二番目の友のところへ行ったら、とても心が痛むので宮殿の門までは付いてゆくが、中へは入らない、という答えであった。三番目の友のところへ行くと、次の答えを得た。

「あなたを悲しく思います。不幸を和らげるために一緒に行きましょう。王様の前であなたのために弁護してあげましょう」

第一の友は金銀である。人が多いに信頼している友であるが、ソロモン王「平安あれ」が「箴言」(11:28)で言っている。「富に信を置く者は滅びん」人は神の祝福された名のみ信を置くべきである。神こそ根本なる富であり、永遠なる財であるから。「ヨブ記」(22:25)にある通りである。「全能者はあなたの宝であり、あなたにとって貴重な銀である」第二の友は人の妻子であり、墓場までは付いて来てくれるが、中へは入らず、そこから戻って行く。第三の友は慈愛と善行である。これこそ墓を超えて付いて来て、その人に先んじて進み、彼のために弁護してくれる友である。 (Sources: Kad ha-Kema, No.1, pp.6-7. MY, No.762a)

## 37 三人の友の寓話

### 第二伝承

またミドラシュにも語られている。人が亡くなる時に付き添ってれるのは銀でも金でもなく、悔悟と善行だけである。

これは三人の仲間を持っていた人になぞらえられる。一人はその人をととても好いていた。二番目の人も好いていたが、それ程ではなかった。一方その人は三番目の人とは特別に懇意ではなく、全く心に留めていなかった。ある折り王がその人に呼び出しを掛けたので、王の命令を遂行しようとして王の使者が大急ぎで彼の許に行き宮廷に連れて行こうとした。その人は王を怖れていたため、恐がりとても心配になって言った。

「多分私に恨みを持つ者が讒言したのであろう。私が王の許へ着いたら処刑されるだろう。今できる最良のことは私の魂が信頼している最良の友を呼んで、一緒に連れて行って王の前で私をよく弁護してもらおうことだ」彼は出掛けて他の二人よりも好意を抱いている最初の仲間呼び出しを掛け事態を語った。しかし彼は一緒に行くことを望まず、同意してくれなかった。彼は第一の仲間をそのままにしてとても落胆して戻って来て言った。

「もう一人の仲間の所へ行き、一緒に行くことを頼もう」彼は行って頼んだところ、第二の仲間が言うには

「私は王の前に出ることはしません。しかし道々あなたを守るために同行してあげましょう。しかし王宮に着いたならば、あなたと別れて一人で戻ります」彼はそれまで大切に思っていた第三の仲間の所に行き一緒に来てくれる様に求め、他の二人の仲間に関して起こったことを話しました。第三の仲間は彼に言いました。

「心配ありません。私が同行します。王様の所へ行ったら、あなたの弁護をし、あなたを救うためにできることは何でもいたしましょう」第三の仲間は直ちに王の所へ同行し、彼の弁護をして救ってくれた。

沢山好意を寄せていた第一の仲間とは金銭である。人は世界の中で他のなによりも好んでいるが、この世を去る時には人を見捨てて着いてくることはない。詩篇の言う通りである：

「彼の富は彼に付き従わず」(49:18) 第二の仲間は息子・親戚・友人であって、墓場迄は来てくれるが、埋められてしまうと見捨てて戻ってしまう。王の前で弁護してくれる第三の仲間とは、悔悟と善行である。これこそ人がこの世を去る時にも弁護するために付き従ってくれる。予言者イザヤの言う通りである：「君の正義は君に先立って進む」(58:8) (sources: Menorat ha-Ma'or II, No.278; p.90. MY, No.762b; BJ IV, 32-35, 257, 286 [NBJ I, No.164])

聖者は語った。

知るべし。或る人が三人の友を持っていた。第一の友を守り目の林檎の様に思い、とても親しいと考え、思いを寄せ彼のためであればどんな危険も厭わなかった。彼のためには労苦を惜しまず、どんな楽しみごとよりも彼のことを考え、すべての喜びを分かち合い、彼のためには昼を夜にし、夜を昼にした。それ程迄に彼を愛していたからであった。第二の友に感じる程度はそれよりかは低く、第一の友程には親密ではなかった。それでもとても親しいと思い、時間があればいつも一緒にいて彼に仕え守り彼のためであればどんなことでもした。しかし第三の友のことは忘れがちで、心を煩わすことはなく、彼に対する思いも親愛の情なく、ただたまに例外的にあちこちで共に時を持つだけであった。

さてこの人に変化をもたらす時がきた。彼は持っていたものを失い貧乏になってしまった。王が彼に罪ありと見たので、悪い運命から自分を救いだす手だても彼のために弁護してくれる人も残されていなかった。そこで彼は信頼する朋友の所に行き、彼の苦悩を語り助言助力を苦しみ一杯の声で頼んだ。第一の友を手始めに言った。

「信頼できるお友達、私を憐れんで下さい。私が何につけても如何にあなたを優先してきたか、如何にあなたを愛していたか、あなたのためにできることはしてきたことを御存知でしょう。しかし今あなたの助力援助を必要とする日がやって来ました。幸せなことにかつて私がしてあげたことを進んで返してくれる様な親切で憐れみ深い友人を持っています。賢者は言いました。『最上の道具が如何に君を助けてくれることか。最良の兄弟が何を助けてくれることか。一方善き友は常に君を見つめていてくれるだろう』またこうも言いました。『これはどんな火も焼くことのできない宝である』」しかし第一の友は言った。

「もはやあなたとの友情に喜びはありません。あなたとの交わりに楽しみはありません。何故なら私にはあなたとは別に他の朋友があります。その人のお陰であなたを考えたりあなたのことを考慮したりするゆとりはありません。そちらの方があなたより私に相応しいのです。ですから差し上げる何ものもありませんし、私の財産であなたをお助けするわけにもいきません。後に自分自身のために必要となるかもしれないからです。賢者は言いました。『誰でも神に捧げねばならない。自分を悪から救い贖ってくれる人に最も負っている』すべての真理の中で次のことを知りおき下さい。私はあなたを助ける何ものも持っていません。ただこの日にあなたをくるむ着替えが二着あるのでそれを持って御退散下さい」

そこで彼は第二の友の所へ行き行った。

「あなたは苦難の時の私の拠り所であり最上のお仲間です。私達の間によくの愛情と深い信頼があったのを御存知でしょう。またこの数年というものを込めて憐れみの情を持ってお助けしてきたことをもです。今は私の方からちょっとだけお返しをお願いするのはです。私

が差し上げたものを思い出して、信頼するに相応しい善良にして正直な友に値するものとして私を助けて下さい。可能な限りのものを私に与えて下さい。というのもこれが王様関連で私に起こったことなのです。賢者がずっと前から言っています。『信頼できる同朋が最も貴重な所有物である。というのも安楽の時には宝石であり、苦難の時には盾となるからだ』またこうも言っています。『敬虔さは年とは逆に力の塔のために用意される』しかし第二の友は答えて言った。

「私は自分自身の辛い悲しい心で問題を抱えています。だからあなたの厄介事まで持ち込まないで、お帰り下さい。私は長らくあなたのお仲間でないことに慣れてしまいましたから。私達は違った道を進んでいますし、私の財産をあなたに差し上げるのは相応しくありません。他人に憐れみを掛けてもらおうと貧乏で傷つき、嘆息し惨めになります。賢者は言っています。『我が時にいかなる悪と辛酸あるかを知らず。また富裕なる死が貧しき生よりも悪しきかをも知らず』しかしあなたがお望みなら一緒に行って王の門までお見送りしましょう。そこからあなたよりももっと緊急な自分の用事に戻ります」

そこで彼は第三の友の所に行き言った。

「御貴殿、私はあなたの前で大いに恥じています。赤面して地に頭を着け、言う言葉もありません。しかし時が差し迫って私をここに駆り立てました。恐らくあなたの親切が私への助けとなるでしょうから。賢者は言っています。『心寛き者のみ不幸で貧しき者の助けとならん』またこうも言っています。『贈答は抵当にして、寛大なる者はふたつの卓を楽しむ。何故なら彼はこの世で賞賛され、来世ではその親切の結果の果実を食する』」すると第三の友は答えて言った。

「御同朋、私はあなたに親切という借りがあります。その親切は私の力のうちにあり、長い間あなたのことを思うよすがともなっていました。私の持つすべてで以てあなたをお助けして、私の全霊全力で援助して差し上げたい。というのも賢者は言っているからです。『すべての家には垣があり、すべての時には人があり、すべての時代には絆があり、すべての行いには償いがある』私はあなたの友人でありあなたを裏切ることはできません。あなたが私を殆ど顧慮しなかったからといって心苦しむことはありません。その僅かを私の魂と力の内に貯え、昼も夜も自分に実行していたので、その僅かをますます大きく成長させるあて近くにも遠くにもその僅かで以て取引をしてきました。神様の思し召しがあなたのすべてのことながらに善き様に現れることを望んでいますから、絶望せずにあなたの主にお助け頂くようになさい」

人はこれを聞いた時、喜び幸せになり、静かに且つ信頼の心で立ちつくし、確かな気持ちになって言った。

「私がどんなことを印したのかはわかりません。私は真実を保っている忠実な友人を無視して他の友人のことばかり考えていました。つまり二人の偽の裏切りの友にたいしてばかりことをしてきたからです」

さあいいですか、王子殿、次の様に知るべきです。第一の友は人の富と財、金と所有物です。そこからは人は埋葬の際にくるまれる二枚の布切れ以外に得るものはありません。第二の友は人の妻・子供・家族・親戚・隣人であり、人に伴っていなくなると少しは嘆いてくれて、墓場までは付いてきてくれます。第三の友は人が行った慈善であり、人を助け救うもので、苦しみから救出し、困難から引き上げてくれ、悲しみから喜びへと、疲労から安息へと導いてくれます。(Ben ha-Melekh ve-ha-Nazir XI, pp.39-42. MY, No.763; BJ IV, 36-38, 275-76 [NBJ I, No.165]; Tsefunot, 263-64. Schwarzbaum, 21)

== \* \* = = \* \* = = \* \* ==

エヴリマンの内容をよく表す偈として「妻子珍宝及王位…」が引かれたことがあり、<sup>(5)</sup> その出典として『大集経』所収の偈を同定し、漢文と西藏文を引き日本文学中でのその偈の使用の変遷をたどったが、<sup>(6)</sup> 梵文はついに不明のままであった(『大集経』は部分的なものは別として、全体として梵文が今日伝わってはいない)。仏教外の文献にまで目配りをする必要は日頃提唱していながら、自らは実践を怠る体たらくであったが、『ヴィヤーサ・スバーシタ・サングラハ』中の平行偈<sup>(7)</sup>を指摘して補いしたい。

artha grhe nivartante smasane mitrabandhavah /  
sukrtam dukrtam capi gacchantam anugacchati //

財は家にとどまりぬ。友人・親族は墓場に [とどまりぬ]。

善行また悪業が、去りゆくものに連れ添い行く。

これがそのまま『大集経』の偈の梵語原文であるという程緊密に対応しているわけではないが、偈の主旨は明らかに同一であり、同じ類の偈の集団のひとつのヴァリエーションと見なしてよい。パーリ語にもこれの平行偈があるのは注目される。『ローカネツヤ・パカラナ』という東南アジアに伝承された処世訓を教える偈の集成本の中にある。

attha ghare nivattante susane mittabandhava /  
sukatam dukkatam kammam gacchantam anugacchati //

(Padmanabh S. Jaini, "Some Niti Verses of the Lokaneyya Pakarana," *Buddhist Studies in Honour of Hammalava Saddhatissa* (Nugegoda: Univ. of Sri Jayewardenepura, 1984), 116-122)

『万人』から想を得て新しい劇作化されたものがホーフマンスタール『イエーダーマン』であった。前稿では全集所収の該当箇所しか挙げ得なかったが、次のエディションがある。

*Hofmannsthal, Jedermann: Das Spiel vom Sterben des reichen Mannes*, ed. by Margaret Jacobs. London: Thomas Nelson and Sons Ltd., 1957.

長めの序文中に研究が呈示されているが、pp.xvii ff.に1902年4月23日付の書簡を引いて、ホーフマンスタールが『万人』を読んだことに『イエーダーマン』執筆の動機があることを

確証している。更に『万人』を超えてそれを遡る材源にも筆が及びバルラームとジョサファトなどを挙げてはいるものの、総合的な知見に向かう考察は乏しい。

\* \* \* \* \*

上記拙論は道徳劇エヴリマンから話題を起こしたので、エディションその他については披見できたものは記しておいたものの当時の筆者の環境・能力からして研究史を網羅することは不可能であり、不足が目立った。その後補足を作成したものの（プリ通§ 84, AI XXV）、なお未見のものは多かった。今回もその欠を補う作業は余暇にするには余りに大きな課題であるのでそれは当初より断念はしたものの、若干の知見を備忘用に記しておきたい。前回と同じものもときにあるが、再版とか刷りが異なる場合があるので重複を顧みず記してある。

(略号：Em = Everyman, El = Elckerlijck)

#### **Editons & Facsimiles** (incl. modernized versions)

- Adams, Joseph Quincy. 1924. "Em," *Chief Pre-Shakespearean Dramas: A selection of plays illustrating the history of the English drama from its origin down to Shakespeare* (Boston: Houghton Mifflin, 1924), 288-303.
- Allen, John. 1953. "The Summoning of Em," *Three Medieval Plays* (London: Heinemann), 1-40.
- Cawley, A.C. 1956. "The Moral Play of Em," *Em and Medieval Miracle Plays* (London: Dent; new ed. 1974, rev. 1997), 205-234.
- 1961. *Em* (= Old and Middle English Texts). Manchester: Manchester U. P.
- Cooper, Geoffrey and Christopher Wortham. 1980. *The Summoning of Em*. Nedlands: University of Western Australia Press.
- Farmer, John S. 1906. *The Summoning of Em* (= The Museum Dramatists). London: Gibbings & Co. for the Early English Drama Society.
- Greg, W.W. 1904. *Em, from the edition by John Skot preserved at Britweell Court* (= Materialien zur Kunde des älteren Englischen Dramas 4). Louvain: A. Uystpruyst.
- 1909. *Em, from the edition by John Skot in the possession of Mr. A.H. Huth* (= Materialien zur Kunde des älteren Englischen Dramas 24). Louvain: A. Uystpruyst.
- 1910. *Em, from the Bodleian Library and the British Museum together with critical apparatus* (= Materialien zur Kunde des älteren Englischen Dramas 28). Louvain: A. Uystpruyst.
- Huzlitt, W. Carew. 1874. "Em," *A Select Collection of Old English Plays* (originally published by Robert Dodsley in the year 1744), vol.I, 4th ed. (London: Reeves and Turner), 93-142 [with Hawkins's Preface].
- Lester, G.A. 1981. "Em," *Three Late Medieval Morality Plays* (London: Ernest Benn), 59-105.
- Moses, Moutrose J. 1908. *Em: A Morality Play*. New York: Mitchell Kennerley.
- Pollard, Alfred W. 1890. "Em," *English Miracle Plays Moralities and Interludes: Specimens of the Pre-Elizabethan Drama* (Oxford: Clarendon P.; 8th ed. 1927), 77-96 cum 202-204, 224d.

Schell, Edgar T. & J.D. Shuchter. 1969. *English Morality Plays and Moral Interludes* (New York: Holt, Rinehart and Winston), 111-140.

Walker, Greg. 2000. "Em," *Medieval Drama: An Anthology* (Oxford: Blackwell), 280-297.

### Secondary Materials

Adolf, Helen. 1957. "From *Em* and *El* to Hofmansthal and Kafka," *Comparative Literature* 9, 204-214.

Bang, W. 1905. "Zu *Em*," *Englische Studien* 35, 444-449.

Eliason, Norman E. 1935. "I Take My Cap in My Lappe," *Philological Quarterly* 14, 271-274.

Goldhamer, Allen D. 1973. "*Em*: A Dramatization of Death," *The Quarterly Journal of Speech*, vol.59 no.1 (Feb. 1973), 87-98.

Holthausen, F. 1921. "Zu *Em*," *Beiblatt zur Anglia* 32, 212-215.

Jambeck, Thomas J. 1977. "*Em* and the Implications of Bernardine Humanism in the Character 'Knowledge'," *Medievalia et Humanistica*, new ser. 8, 103-123.

Johnson, Wallace H. 1968. "The Double Desertion of *Em*," *American Notes & Queries* 6, 85-87.

Kolve, V.A. 1972. "*Em* and the Parable of the Talents," in Jerome Taylor and Alan H. Nelson (eds.), *Medieval English Drama: Essays Critical and Contextual* (= Patterns of Literary Criticism)(Chicago: The U. of Chicago P.), 316-340.

Moran, Dennis V. 1972. "The Life of *Em*," *Neophilologus* 56, 324-330.

Spinrad, Phoebe S. 1987. "Death as Educator: *Em*," *The Summons of Death on the Medieval and Renaissance English Stage* (Columbus: Ohio State U.P.), 68-85 cum 293.

Thaler, Alwin. 1936. "Shakspeare, Daniel and *Em*," *Philological Quarterly* 15, 217-218.

Wasson, John M. 1972. "Interpolation in the Text of *Em*," *Theatre Notebook* vol.27 no.1 (Aut. 1972), 14-20.

Williams, Arnold. 1963. "The English Moral Play before 1500," *Annuaire Medievale* 4, 5-22, esp. 20-21.

\* ) もとより上の補足により完璧に近づくわけでもないが、次に記す書誌等を参照することにより古刊本も含めて全貌を知ることができる。滞英中であればその原物にあたることも全く不可能というわけではないが、限られた期間の中でそれに時間を割くわけにはゆかなかった。

W. Carew Hazlitt, *A Manual for the Collector and Amateur of Old English Plays* (London: Pickering & Chatto, 1892), 77; Walter Wilson Greg, *A List of English Plays written before 1643 and printed before 1700* (London: The Bibliographical Society, 1900 [for 1899])138-139; A.W. Pollard & G.R. Redgrave, *A Short-Title Catalogue of Books Printed in England, Scotland, & Ireland And of English Books Printed Abroad 1475-1640* (London: The Bibliographical Society, 1926), Nos.10603-6 = p.231a, 2nd ed. vol.I (1986), Nos.10604-10606.5 = p.472b; W.W. Greg, *A Bibliography of the English Printed Drama to the Restoration*, vol.I (London: The Bibliographical Society, 1939), No.4 = pp.82-84; Brownell Salomon, "Early English Drama, 975-1585: A Select Annotated Bibliography of Full-length Studies," *Research Opportunities in Renaissance Drama* 13/14 (1970/71), 267-277; Carl J. Stratman, *Bibliography of Medieval Drama*, 2nd ed. vol.I (New York: Frederick Ungar, 1972), Nos.5501-5655 = pp.554-567; Peter J.



Houle, *The English Morality and Related Drama: a bibliographical survey* (Hamden: Archon Books, 1972), No.XII = pp.35-38; John Leyerle, "Medieval Drama," in Stanley Wells (ed.), *English Drama (excluding Shakespeare): Select Bibliographical Guides* (London: Oxford U.P., 1975), 19-28; Sheila Lindenbaum, "The Morality Plays," in Albert E. Hartung (ed.), *A Manual of the Writings in Middle English 1050-1500*, vol.5 (New Haven: The Connecticut Academy of Arts and Sciences, 1975), 1599-1621; George M. Kahrl, *The Garrick Collection of Old English Plays: a catalogue with an historical introduction* (London: The British Library, 1982), No.406 = p.128; Sidney E. Berger, *Medieval English Drama: An Annotated Bibliography of Recent Criticism* (= Garland Medieval Bibliographies 2)(New York: Garland, 1990); Krystan V. Douglas, *Guide to British Drama Explication*, vol.I Beginnings to 1640 (New York: G.K.Hall, 1996), 13-16.

なお中英語説教集にも類話が含まれている。これの直接の典拠を決定することはなされてもおらず、また相当に困難なことでもある。取り敢えず該当部分を訳出しておく。

Woodburn O. Ross, *Middle English Sermons, edited from British Museum Ms. Royal 18 B. xxiii* (= EETS o.s. 209)(London: Hunphrey Milford, 1940)

さてこの 私は次の様な物語を見出しました。或る時四人の友人を持っている人がいました。そのうちの三人に対してはその人は多いに好意を抱いていましたが、四人目には僅かの好意しか寄せませんでした。さて次の事態が起きました。その人はその国の王に対して罪を犯し、死刑に値するという法律に抵触してしまいました。その人が逮捕され審判に引き出される時に、死ぬ前に友人と話す機会を持てるようにと役人達に懇願しました。

先ずは一番信頼していた第一の友人の所へ来て、王から助けて救ってくれる様にと頼みましたが、第一の友人は次の様に答えました。

「王の重罪人を抱え込んで保護するわけにはいきません。あなたは死刑に値するからです。ですから代わりにあなたを包み込む布を買ってあげましょう」他の答えは全く聞かれませんでした。非常に辛い思いでそこを去り、第二の友人を求めて行き、王から救って命を助けてくれる様にと頼みました。第二の友人が答えて言うには、王の重罪人が自分から好意を受けられるいわれはなく、逆に王の裏切り者が死に到るのを助けてやろう、ということです。第二の友人のところでもうまくいかないのので、第三の友人を求めて行き、王から救って王が彼の罪を許してくれる様にと頼みました。第三の友人が答えて言うには、助けることはできない、王の裏切り者であるから首を吊るのを手伝おう、ということです。そこでその人は少ししか信頼していなかった第四の友人を求めて行き、彼と一緒に行って王に罪を許してくれる様にと頼みました。第四の友人は答えて言いました。

「あなたは私に相当に頼んでいますが、殆どその資格はありません。でもあなたと一緒に王の所に行き、あなたの罪を許してくれる様に王にお願いしてあげましょう。あなたが死なねばならないなら、あなたに代わって私が死にましょう」

## XXXVIII. 小鳥の教訓補足

本話について論究した拙論<sup>(8)</sup>の意図は、それまで知られていなかった東洋のパラレルを指摘することにあつたため、書誌的な完璧さからは程遠いものであつた。それでもその時点の環境の中ではかなり網羅し、また作業の途中段階では Tyroller の書も入手できた。拙論起草当時直接閲覧できなかった新古並びにその中間の書誌的業績をみつ挙げておこう。

Victor Chauvin, *Bibliographie des ouvrages arabes ou relatifs aux arabes publiés dans l'Europe chrétienne de 1810 à 1885*, III (Liège: Vaillant-Carmanne, 1894), pp.43-104 = No 14; VI (1902), pp.110-111 = No 275. [前者はBJ関連、後者は千夜一夜関連である]

Haim Schwarzbaum, *The Mischle Shu'alim (Fox Fables) of Rabbi Berechiahha-Nakdan: A Study in Comparative Folklore and Fable Lore* (Kiron: Institute for Jewish and Arab Folklore Research, 1979), pp.548-549 = n.15.

Ulrich Marzolph, "Lehren: Die drei L. des Vogels," *Enzyklopädie des Märchens*, Bd.8 (Berlin: Walter de Gruyter, 1996), Spal. 883-889.

これらに Tyroller 並びに拙論を付き合わせたとしても、完全網羅には程遠い。どうしてかという、これらはいずれも書承伝承に主眼を置いたもので、口承伝承資料については手薄の感が否めなかつたからである。こうした状況の中で口承伝承を書き留めたものいくつかパラレルを見出したので備忘用に書き留めておきたい。先ずは Angelo S. Rappoport, *The Folklore of the Jews* (London: The Soncino Press, 1937), 175-176 に "Three Precepts" という題で紹介されている。残念ながら原語での採集でなく英語で記したものであるが、以下比較考察の材料とするために訳出しておこう。

== \* \* == \* \* == \* \* ==

### 三つの訓戒

あるとき獵師が鳥を捕まえた。それはとても賢くて七十もの言葉を話し、捕まえた人にこう話しかけた。

「逃がして下さい。そうすればあなたに三つの訓戒を教えましょう。それはあなたにとっても有益なものです」

「その規範を言いなさい。そうすれば放してやろう」と鳥追いは言った。

「先ず私に誓って下さい」と鳥は言い返した。「約束を守って、必ず私を逃がすと」男が約束を守る誓いを立てたので鳥は言った。

「第一の訓戒は、起こってしまったことは何であろうと後悔しない。第二の行動規範は、

不可能で信じ難いことを言われても信じてはならない。第三の訓戒は、到達不能なことをしようとするな」こう言うと鳥は捕獲人に約束を思い出させ、放す様に求めた。男は手を開いて捕まえた鳥を飛ばせてやった。

鳥は周りの木よりも高い木のでっぺんに止まって、下の男をからかって呼び掛けました。

「おばかさん、あんたは私の体の中に高価な真珠が隠されているのも知らないで飛び立つのを許してしまった。この真珠こそ私の知恵の源なのだ」鳥追いはこの言葉を聞いたとき、鳥を逃がしたことを大いに悔やみ、木に向かって突進し登ろうとした。しかし努力も空しく、墜落して足を折った。鳥は声高に笑って言った。

「おばかさん、三つの賢明な訓戒を教えて一時間も経たないのにもう忘れてしまっている。過ぎたことを悔やんではならないと言った筈だ。なのにお前は私を逃がしたことを悔やんでいる。信じ難いことを信じるなとも言った。なのに私が実際に体内に高価な真珠を持っているなどと信じる程騙されやすい。私は絶えず餌を探しているちっぽけな野生の鳥に過ぎない。そして最後には、到達不能なものを手に入れようと無駄な努力をするなど教えた。にもかかわらず鳥を手で捕まえようとして墜落して足を折った。哲学者が言っているのはお前の様な性質の者のことだ。

『百の勲章が愚人に与えられるよりも、ひとつの非難が賢人に向けられることの方がありうることだ』(箴言XVII, 10) 悲しいかな、お前も例外ではない。お前と同じように愚かな者は沢山いるから」こう言うと賢い鳥は餌を求めて飛び去った。

== \* \* == \* \* == \* \* ==

同様な例がNathan Ausubel, *A Treasury of Jewish Folklore: stories, traditions, legends, humor, wisdom and folksongs of the Jewish people* (New York: Crown Publishers, 1948), 628にある。

== \* \* == \* \* == \* \* ==

## 賢い鳥と愚かな人

あるとき鳥刺しが鳥を捕まえた。しかしそれは特別は生き物で、人間の言葉を七十も理解できた。そこで鳥は捕獲人に自らの口で嘆願した。

「逃がして下さい。そうすればあなたに三つの有益な教えを伝えましょう」

「先に私に言いなさい。そうしたら放してやろう」と鳥刺し。

「先ずは約束を守ると誓いを立てて下さい」と鳥は答えました。

「お前を逃がしてやることを誓おう」と人は応えた。そこで鳥は言った。

「それでは謹聴。第一の教えは『起こってしまったことを悔やむな』第二の教えは『信じ難いことを信じるな』第三の教えは『到達不能なことをしようとするな』」人に自分の知恵

を伝えると鳥は頼みました。

「さあ放して下さい。約束ですよ」鳥刺しは同意し放してやった。そうすると鳥は羽を広げて近くの高い木のでっぺんまで飛んでゆき、そこから下の人を嘲って言った。

「なんて馬鹿なんでしょう。私が体の中に計り知れない価値のある真珠を持っているのも知らないで手の内から手放すなんて。その真珠の魔法の力で私は賢くなれたのですよ」これを聞いて鳥刺しは鳥を逃がしてしまった愚かさを悔やんだ。失敗を取り返すべく鳥が止まっている木に登り始めたが、やっと半分程登ったところで手を離してしまい、地面に墜落した。骨を折って痛さに呻いた。鳥は人を見下ろして笑った。

なんとまあ馬鹿なんでしょう」鳥は叱責した。「私の知恵を授けてから間もないのに、もうそれを忘れてしまっている。起こってしまったことを悔やむなと言ったのに、私を放したことをもう悔やんでいる。信じ難いことを信じるなども教えましたが、私の体の中に未曾有の働きをする真珠があるなどという作り話を本当だと思っている。私は絶えず餌を探さねばならないありきたりの鳥に過ぎないのですよ。最後に到達不能なことをしようとするなど警告したのに、羽のある鳥を素手で捕まえようとした。私の教えに注意を向けなかったので、今骨折し血を流しています。あなたの様な人に対して言う諺があります。『百の勲章が愚人に与えられるよりも、ひとつの非難が賢人に向けられることの方がありうることだ』残念なことに人のなかにはあなたの様な馬鹿が沢山います」

== \* \* == \* \* == \* \* ==

ガスター編集のラビの説教例話集は既に言及したことがあるが、上引のものと強く連関するものであることを確認するために、和訳を与えておこう。

Moses Gaster, *The Exempla of the Rabbis* (London: The Asia Publishing Co., 1924), No.390 = pp.149-150 cum 256.

あるとき獵師が鳥を捕まえた。それは人間の言葉を話し、逃がしてくれるように頼んで、三つの賢いことがらを教えようと言った。(1) 過ぎたことを悔やむな。(2) 信じ難いことを信じるな。(3) 入手不能なものを手に入れようとするな。獵師は鳥を放したので、鳥は木のでっぺんまで飛んでゆき言った。

「私の体の中には千ディナールの価値の真珠がある」男は後悔して木に登ろうとして墜落した。鳥はあざけって言った。

「三つの教えのどれからも益を受けていないね。私はもう逃げてしまったのだから、どうして悔やんだりするのだ。私は小さいのだからそんなに大きな真珠が体の中にあるのは不可能だ。無理なところに登らないようにと警告したのに、登ろうとして墜落した」

他に *Mimekor Yisrael* にもあるが殆ど同一なので省略する。また H. Parker, *Village*

*Folk-Tales of Ceylon*, Vol.III (London: Luzac, 1914), No.256 = p.354が関連で挙げられることもあるが、別物として扱うべきである。念のため和訳を与えておく。

### 三つの真実

ある日ハイエナが道端で山羊に出会って、言った。

「この場から去る前に俺に真実である三つの言葉を言え。さもないと食ってしまうぞ」山羊は言った。

「君は僕にこの場所に出会った。もし戻って他のハイエナに会ったらこう言うとします。『道端で山羊に出会ったけれど、そいつを殺さなかった』と。聞いたハイエナは言うでしょう。『お前は嘘を言っている』」ハイエナは言った。

「真実だ」山羊は言った。「もし僕がここから去ることが出来て家で他の山羊に会ったらこう言います。『僕は道端でハイエナに出会ったけれど、やつは僕を殺さなかった』聞いた山羊は言うでしょう。『君は嘘を言っている』」ハイエナは言った。

「真実だ」山羊はハイエナに言った。「三つめはこうです。もし君が僕達二匹がこの件を話しているのを見ているとしたら、君は空腹ではない」するとハイエナは言った。

「もういい、行け。俺は空腹ではない。もし空腹だったら、こんなところでぐたぐたと話しているわけがない」

~~~~~

以上はAT 150関連のものであり、相互によく対応する。更に広く蒐集する場合にはAT 910をも射程にいれることがある。こちらに関わるものとしては、Dov Noy, *Shiv 'im sipurim ve-sipur: mi-pi Yehude Maroko* (Yerushalayim: Bi-tefutsot ha-golah, 1964), p.135 = No.69.

本話を主題とした研究論文があるのを迂闊にもこれまで見落としていたので、ここに補足し、且つ若干の論評を加えておこう。

Marie Campbell, "The Three Teachings of the Bird," in Raphael Patai, Francis Lee Utley and Dov Noy (eds.), *Studies in Biblical and Jewish Folklore* (= The Indiana Univ. Folklore Ser. 13)(= The Memoir Ser. of the American Folklore Society 51)(Bloomington: Indiana Univ. Pr., 1960), 95-107.

1960年という出版年を考慮にいればかなり包括的に扱おうとした意図が窺える。しかしこの時点であっても、まだまだ追加が期待される程度の蒐集でもあるし、研究史をきちんと跡付けた上での作業でもない。また集められたヴァージョンの相互の関係は全く論じられてはいない。98頁の下から7行目にて "its earliest known source in the Buddhistic birth

stories" というのが具体的に何を指しているのか不明である。註10には T.W. Rhys Davids の書が *Buddhistic Birth Stories or Jataka Tales* と誤った形で引かれている。正しくは *Buddhist Birth Stories; or, Jataka Tales. the oldest collection of folk-lore extant: beint the Jatakathavannana, for the first time edited in the Original Pali by V. Fausböll, and translated by T.W. Rhys Davids. Translation. vol.I (= Trübner's Oriental Series)(London: Trübner, 1880)* である。<sup>(9)</sup>この書はパーリ語ジャータカ集成の最初の部分の英訳も含まれているが、そもそもパーリ・ジャータカ集に本話は含まれていない。その直後にパーリ語ジャータカの英語全訳集を挙げているが、全6巻プラス索引巻の計7冊からなる大著の巻数を挙げずに頁だけ挙げているということにより、同書を実際には見ずに孫引きしたことが予想される。<sup>(10)</sup>"E.B. Cowell, ed., and H.T. Francis, trans." という表記も妙である。第V巻に限れば両者の関係はその通りかもしれないが、両者は全巻を通じた編者であり、またどちらもその他の訳者と共にいくつかのジャータカ物語の英訳を担当している。

98頁の下から4行目には "The earliest known text is embodied in the Barlaam and Joasaph romance" とあり、上の表現と矛盾する。the Barlaam and Joasaph romance (以下 BJ と略す) は Buddhist birth stories ではないからである。決定的な誤りは "written in Greek, supposedly by John of Damascus" である。"the original Greek text" と書いている様に著者は BJ の原典がギリシア語で書かれたものと誤解しているらしい。<sup>(11)</sup> BJ の成り立ちと変遷が極めて複雑で、ギリシア語版は多数ある伝本の後代のひとつに過ぎないことは、註4にある Jacobs の書を引くだけでなく少しでも読めば了解されることである。また著者をダマスクスのヨハネとするのが伝統的な誤りであることは1960年の時点でも明かである(この誤りは100頁9行目でも繰り返されている)。これは前項中に挙げた拙論中で厨川文夫氏が同じ初歩的な誤りをしたことを指摘した際に事情は説明してあるので再説はしない。なお著者はギリシア語版のタイトルを英語で記してあるが、その典拠はギリシア語版ではなく、BJ の中英語／初期近代英語のエディションであるマクドナルドの書となっている。この著者は多種の文化圏にまたがる主題を扱いながら、一次資料も二次資料も英語のものしか参照できないかの様である。<sup>(12)</sup>99頁の下から8行目にも "an old Indian tale" と本話のインド版があるかの様に書いているが、具体的に何を意味しているのかは不明である。100頁6行目には "the Barlaam text in its earliest form is a Christianized version" とあるのは、99頁の12行目の "In Christianized versions ..... in non-Christian versions ....." というのと矛盾する。両方の表現の顔を立てると、BJ の成立過程にあってキリスト教版から非キリスト教版が派生したことになるが、そういうコースは考えられない。そもそも BJ 自体が仏伝に素材をとったキリスト教版であるから、上の様なふたつの版の存在は考えにくい。100頁14行目 "after the departure of Alexander from India" は徹底的におかしい。アレクサンダーとセレウコス はインド進出が悲願であったが、チャンドラグプタの活躍によりついにそれは成らなかったもので、インドから出発のしようがない。BJ の翻訳として "Indian, Chinese" を挙げ

るのも誤りである。存在しないものを挙げているから、レファレンスも伴っていない。100頁下から8行目で、ヨアサフ王子が仏陀であるという再発見は19世紀を待たねばならなかった、という言葉は研究史に対する無知を露呈している。BJに仏伝の跡が見られるという指摘は既に17世紀になされている。すなわち Diego do Couto, *Decada quinta da Asia dos feitos que os Portugueses fizeram*, livro VI cap.II (Lisboã, 1612) である。<sup>(13)</sup> バルラームとヨアサフの名は古いヘブライの響きを持っているというのも勝手な捏造である。それぞれが bhagavan と bodhisattva に由来することはほぼ定説化している。<sup>(14)</sup> 本話がユダヤのエクセンプルムとして語られたこともあり、ガスターの集成本にも収録されている。著者はガスターが本話の注記の中で30以上の項目を挙げているとするが、実際の項目数は19であるので(一次文献二次文献の混在である)、<sup>(15)</sup> 英語の書も読めていないことになる。本話は『ゲスタ・ローマノールム』(以下GRと略す)にも収録されているが、キリスト教以前の資料に基づいた世俗文献であると102頁の中程に記してあるが、GR自体を繙いていないことを物語っている。確かにGRに本話は収録されているが、本話が収録されている部分はBJからの抜粋といってもよく、<sup>(16)</sup> バルラームの他の教訓例話のいくつかと共に一緒に配置されている。またGRは題名の通りローマ人の事蹟が一部収録されてはいるものの、全体はキリスト教の説教例話集となるような構成をとっているため、キャンベルの様な記述は極めて不適である。

本書はイソップ系寓話集のある種のものにも収録されている。著者は102頁の最後の段落で "Jacobs' edition of *The Fables of Aesop*" にあるという書き方をしているが、言及する書物の性格を全く顧慮していない。ジェイコブズの本はカクストンによる寓話集のエディションと研究であり、カクストンはジュリアン・マショーに基づき、後者はシュタインハーヴェルの大集成本に基づいている。シュタインハーヴェルは様々なイソップ系寓話集を重複を除きつつ合冊したのであるが、非イソップ系物語集にも取材した。『デスキプリーナ・クレリカーリス』がそれであり、本話はその部分に収録されているので、イソップ系の本来の所伝ではない。同じ頁の下から7行目からパンチャタントラにも言及が及ぶものの、何を言っているのか不明である。知識の欠乏もさることながら、文章を書く基本的な訓練が欠如しているためと思われる。すなわち "contains Type 150" といいつつどの伝本のどこにあるのか全く指摘がないので、パンチャタントラのジャイナ系の伝本に同話の平行があるという指摘は拙論がやはり最初であるといつてよい。

キャンベルの論文が収められている書はユダヤの昔話を主題とした論考を集めたものであるから、本論の執筆者もユダヤ文化に関わる事項を専攻している、少なくとも深い関わりを持っている筈である。それだからこそ本論の最終段落でユダヤの人々が東西の文化の橋渡しに果たした貢献を強調して本論を結んでいるのである。しかし本論の最後の句が the Barlaam romance である程BJに重きを置いている割には、BJのヘブライ語版を完全に見落としている<sup>(17)</sup> のは不可解でもあり、本論の存立意義を完全に失わせている。エディションは A.M. Habermann (ed.), *Ben ha-melek we ha-nazir me'et Abraham ibn Hasday*

(Tel-Aviv, 1951) であり、そこからのカタロニア語訳もある。Tessa Calders i Artis, *El Princep i el Monjo, D'Abraham ben Semuel ha-Levi ibn Hasday* (= Orientalia Barcinonensia 2)(Sabadell: AUSA, s.d.).

著者は本話がバートンの千夜一夜の補遺篇にあることも指摘するが、どういう形で収録されているのかは全く述べていない。註30ではこの補遺篇を全6巻であるとし、また160という間違っただけの頁数を挙げているので、実際は読んでいない様である。正しくは全7巻である。本話が収録されている部分はチャヴィス写本（及び関連する資料）にしか見られないものであり、従ってバートンはこれを補遺篇にいらしたのであるが、6巻153-164頁に "History of What Befel the Fowl-let with the Fowler" と標題を与えている。<sup>(18)</sup> ここでは鳥と鳥刺しの間の問答が長々と続くのであるが、本話の対応物は後半の一部分に現れる (pp.161-164)。<sup>(19)</sup>

キャンベルの論文は不備が多いというか、そもそも研究の前提が出来上がっていなかったとの印象を受けるものであった。同じインディアナのサークルに属する Ben-Amos にも本話に言及した論文がある。

Dan Ben-Amos, "Hebrew Parallels to Indian Folktales," *Journal of the Assam Research Society* 15 (1961) [Kaliran Medhi Commemoration Volume] (published in 1963), 37-45.

これはヘブライとインドの比較の材料となるものを9組列挙したもので、3番目が本話である。ヘブライ側からは Gaster, pp.140-150 = No.390, Bin Gorion VI.12-15 を挙げ、Ginzberg を参照させ (書名・頁数なし)、IFA 番号の No.716 を示す。インド側からは Crook & Rouk, *The Talking Trush* 中の口承伝承を引くが、同書は筆者未見である。なお Benfey (Benfey と誤って綴っている) I, 380 を参照させて、その他は一切省略している。両方の側に三つの教訓が並べられているが、順序と内容の違いの指摘がなく、従っていずれが元でいずれが派生形であるかの考察はなされてはいない。

最後に自らへの自戒の意味を籠めた補足をしたい。筆者が本話について最初に言及したのは四半世紀も遡る 1979年5月13日のオークランド大学で催されたアジア学会での口頭発表であるが、Le lai de l'oiselet と呼ばれる中世フランスのレの平行をパンチャタントラ系からと漢文大蔵経から指摘するのが主題であった。その際前者の北方伝承中には Textus Ornatior と Simplicior H の二つの伝本にしか見つからなかったので、南方伝承には無いだろうと即断し探す労力を怠った。この背後には語学力の貧困さ並びに学習意欲の欠如といった研究者としての正しい姿勢が確立していなかったことが作用している。南方伝承すなわちヴァスバーガの伝承の現存最古形を体現するドゥルガシンハ・パンチャタントラはカンナダ語の版しか残っておらず、とても手が出ないと初めから射程内に置かなかったというのが真相であった。その後古ジャワ語タントリ・カマンダカの研究に手を染めるに到り、ヴァスバーガの系統が極めて重要な位置を占めていることを知り、看過できないものであるとの認識を得た。この系統にはより後の段階に属するものとはいえ、サンスクリット『タントローパ



ークヤーナ』があり、これを繙けば容易に知り得る筈であった。<sup>(20)</sup> 遅ればせながら以下に該当話の和訳を呈示して、今までの欠を少しばかり埋めたい。幸いにも Artola が再校訂した十話<sup>(21)</sup>の中に入っているのです、その本文を底本とした。

== \* \* == \* \* == \* \* ==

サルヴァバウマという名のとある王がらい病を患い、医者を呼んで言った。

「この病を取り除く者があれば、良く敬意を払おう」そこで首席医師が言った。

「もし共命鳥が連れて来られるならそれにより病を取り除いて進めましょう。」これを聞いて王は鳥刺しを召して

「よろしき各々方は余に共命鳥を連れて参れ。されば敬意を払おう」と言った。その中のひとりの鳥刺しは

「連れて参りましょう」と言って、罨を持って森に入って行った。そこで雪山の脇にマラティーという蔓草で取り囲まれ、とても柔らかな蓮の繊維を持つしなやかな紅蓮・黄蓮・青蓮・白蓮の薫香を求めてそこに溶け込んだすべての水性の三種の香料にも似た心地よき湖に到達した。その湖で共命鳥の習性を知っている彼は罨を広げて〔湖に〕投げた。一方共命鳥は鳥刺しの行動をすべて見ていて、その場所に来なかった。共命鳥の友達である或る蒼鷺が罨に掛かってしまった。それを見て共命鳥は

「君を放してあげよう」と〔自ら〕仕掛けに落ちた。そこで隠れていた鳥刺しが共命鳥が仕掛けに掛かったのを見て、喜び

「売ってやるぞ」と言った。すると共命鳥は鳥刺しに言った。

「あなたに金を八貫分あげるから、私を放して下さい」鳥刺しは

「生まれてからこの方鳥ばかりを殺してきた。どんな鳥からも金をあげようなどと言われたことはなかった。だからお前の言葉は信用できない」と言って、共命鳥を捕まえて、王に示した。医者は共命鳥を持って行って、めでたき玉座に王を座らせて金でできた千の壺をすべての聖地の水で満たして、右手で共命鳥を王の頭に置いて押さえつけ、聖地の水で浄めを行った。共命鳥の上から撒かれた水が王に降りかかった。すると忽ち王は病気が無くなった。王は回復すると喜んで何も考えることなく共命鳥を放した。医者には百村を与え、鳥刺しには穀物の壺と酒の壺を与えた。共命鳥は宮殿の先端に止まって詩句を唱えた。

「大王よ、この大地に三種の愚人あり。

おんみ、鳥刺し、及び共命鳥なる我なり。

どうして愚かさがあるかというならば、私は仕掛けを見ていながら陥りました。鳥刺しは私から金八貫分を与えられるのに取りませんでした。それからあなたは私を捕まえながらも放してしまいました。もし私の肉を食べたなら、老いも死もやってこなかったでしょうに」と言う空に飛び去った。王は答えずに、おもむろに寢床に向かうと、落胆したのであった。

実は Artola の十話の選択は北方伝承にないものの紹介という意図に基づいている。しかし上に述べた様に少なくともふたつの伝本には対応がある。とはいえ Artola がこう判断したのも、物語自体の主旨は明かに同じではあるものの、進行状態はかなり違っているからである。更には鍵となるのが詩句であるが、これも関連は相当あるものの同一ではない。念のため原文を引いておこう。

trayo murkha maharaja krtsne 'smin prthivitale /  
bhavan sakunikas caham jivamjivaka eva ca //

物語は違っているが、詩句は同じであるという場合もある。よって Artola は見落とししたというのではなく、同一物の派生関係とは見なさなかったということかもしれない。<sup>(22)</sup>

物語は異なるが、詩句が同一である<sup>(23)</sup>という例を追加しておこう。Civaravastu の一挿話中の偈<sup>(24)</sup>である。

purvam tavad aham murkhah pascac chakuntika ime /  
tato raja ca vaidyas ca sampurnam murkhamandalam //

その西藏語訳<sup>(25)</sup>は

re zhig thog ma bdag blun te // phyi nas bya ba 'di dag go /  
de nas rgyal po sman pa ste // blun po'i dkyil 'khor legs par rdzogs //

本話が東洋から西洋へ流入するにあたり様々なルートが考えられるが、そのうちのひとつに前述した *Disciplina Clericalis* (以下 DC と略す) がある。その読解は四半世紀も遡る頃に初めて *Patrologia Latina* 所収本を見て訳文を綴ったが、十年近く経ってから雑誌に連載することができた。それと殆ど同時に別の研究者二人が全く相互のことを知らずに和訳を発表し、我々は一挙に三種の邦訳を持つことになった。拙訳掲載にあたり Hilka & Söderhjelm のエディションのコピーを入手し底本はそこからという形にしたが、本文自体の異同は正書法の問題を別とすれば皆無とってよかった。しかし他のエディションを入手することは困難であったが、このたび更に二種の刊本を見ることができた。本話に該当する箇所を記しておこう。

Fr. Wilh. Val. Schmidt, *Petri Alfonsi DC. Zum ersten Mal herausgegeben mit Einleitung und Anmerkungen. Ein Beitrag zur Geschichte der romantischen Litteratur* (Berlin: Theodor Chr. Fr. Enslin, 1827), No. XXIII, 67-68 (Text), 150-154 (Anm.).<sup>(26)</sup>

Angel González Palencia, *Pedro Alfonso DC, edición y traducción del texto latino* (= Consejo superior de investigaciones científicas)(Madrid - Granada, 1948), No. XXII, 58-59 (texto), 152-154 (tr.) cum 223-225 (*Ysopet historiado*).

少なくとも本話に関する限り一番古い刊本である Schmidt の注記が一番詳細で、当時参照可能であったものを網羅している。特に仏語版 Chastoiement から三つの教訓を含めていくつかのフレーズの対応を引いているが、中世フランスのレ「小鳥の教訓」がDCに由来することは明かであるものの、Chastoiementとの関連を研究したものはなかった。Chastoiementの研究自体大きな課題であるが、本話の流伝の経路のひとつの軸になりそうなので、今後に残されたテーマと言える。González Palenciaが補遺に引く Ysopet も DC系であることは明かであるが、MachoやCaxtonとの関係が興味を惹かれるところでもある。また木版の挿絵も後二者のものと系譜的に繋がりがありそうなので、種々の意味で研究の意義は大きい。こうした小話ひとつをとっても研究を完遂するには課題が満積していて途は遠い。

### XXXIX. 井戸に落ちた男補足

この寓話はカリーラとディムナ系の諸本に採り入れられて各地に広まった。インド内のパンチャタントラ系の諸本のいずれにも収められていないので、恐らくは似たような伝播経路を持ったバルラームとヨアサフ系から混入したものであろう。その伝播に異常な広がりを見せたこのふたつの物語集群のいずれにも収められた本話の広まりを跡付けることはもう殆ど不可能に近い。<sup>(27)</sup>ここではこのいずれもがイベリア半島にまで進出したことを指摘しておこう。カリーラとディムナには中世スペイン語訳があるが、単にスペイン語に訳されたというだけではなく、アラブ=イスパニアの文化の接触の視点で捉えると、文化交流史上の重要な現象のひとつであることが見えてくる。<sup>(28)</sup>刊本の本話の収録箇所は

John E. Keller y Robert White Linker, *El libro de Calia e Digna* (= Clásicos Hispánicos, serie II vol.XIII)(Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas, 1967), 39-60.

Juan Manuel Cacho Blecua y Maria Jesús Lacarra, *Calila e Dimna* (= clásicos castalia)(Madrid: Editorial Castalia, 1984), 120-121.

こうした一連の文献群は東西の文学をつなぐ上で重要な役割を果たしている。カリーラとディムナを含めたいくつかの文献を通してイベリア半島における文化接触を論じた学位論文がかつてロンドン大学に提出されていた。

Celia Margaret Wallhead, *Cultural Contact in the Iberian Peninsula between Islam and Christianity, as Reflected in Specimen Texts of Early Castilian Literature: Primera Crónica General, Calila e Digna and El Conde Lucanor*. Thesis Submitted for the Award of Ph.D., London University, Queen Mary College, February 1974.

外部では容易にみることのできない同書の紹介と批評を兼ねた小文を「ことわざ掲示板」

に投稿してある。<sup>(29)</sup>

『マハーバーラタ』中の本話<sup>(30)</sup>は古くから知られていたが、<sup>(31)</sup> これを中心にして詳しく論じた最初の学者はヴィンテルニッツであろう。<sup>(32)</sup> その後度々論じられたが、我が国でも言及されることがあった。

原實「丘井の喩——二鼠譬喩譚——」『東洋学報』66(1985), 580(019)-561(038).

『マハーバーラタ』所収話が始源形であり、また叙事詩の中でも発展があることを指摘したものである。しかし仏教起源説を採る Vogel の論文を引きながら、それへの論駁はない。

仏教文献は既に何度も指摘されているが、『維摩経』の七喩のひとつが本話であるとされることがある。しかし『維摩経』方便品の本文は、例えば羅什訳で引くと、「是身如丘井」(大正 14.539b26-27) とあるだけで積極的に本話を示すものではない。しかも『維摩経』は井戸＝身体の譬えであるのに、本話は概して井戸＝人生／輪廻(世界)であるから、その主旨は同一ではない。従って『維摩経』の翻訳でそのまま訳して本話に言及しない<sup>(33)</sup>のは適当な措置である。本話との関連がつけられたのは『注維摩詰経』にて羅什が本話を引き、僧肇が解釈を施したのが基になっている(大正 38.342b2-16)。ラモットは訳註に羅什が本話が言及していることを述べパラレルをもいくつか呈示している。<sup>(34)</sup> ラモットは羅什が本話を引いたことを述べる直前に逆接の接続詞を用いているので聖典本文と本話は本来的には結びついていなかったと考えているのであろう。しかし『賓頭盧突羅闍爲優陀延王説法経』では「丘井喩於人身」とあり、またこの経典の identification が少しく変わっていることは CCC No 205 の補注でも指摘されているところである。

造形化はアラブ圏の絵入り写本には数多く見られ、よく引かれるところでもある。ここではインドと中国の作例を挙げておこう。**ギメ博物館**：J.Ph. Vogel, "The Man in the Well and some other subjects illustrated at Nagarjunikonda," *Revue des arts asiatiques* 11 (1937), 109-121 esp. pp.109-115 cum pl. XXXIII. **ナーガールジュナコンダ**：A.H. Longhurst, *The Buddhist Antiquities of Nagarjunakonda, Madras Presidency* (= Memoirs of the Archaeological Survey of India 54)(Calcutta, 1938). **Zayton**: G. Ecke and P. Demiéville, *The Twin Pagodas of Zayton: A Study of Later Buddhist Sculpture in China* (= Harvard-Yenching Institute Monograph Series 2)(Cambridge, Mass.: Harvard U. P., 1935), pl.36 cum pp.53-54.<sup>(35)</sup>

ジャイナ教文献のパラレルは既に古くから指摘されているが、それよりも後になって扱われるようになったものに Vasudevahindi がある。これにも本話が含まれている。<sup>(36)</sup> ジャイナ文献の中でも特にこれは BJ 中の例話と構成・内容がよく一致している。仏教文献中の特に緊密な対応を示すものをも含めて、伝承の経路を再考<sup>(37)</sup>することが有益であろう。

## XL. 造形と文献の関係：カメの空中飛行の場合

「カメの空中飛行」については書誌を作り、その後何度も補足をしたが<sup>(38)</sup>、完璧を期すことはできなかった。また特に造形作品に対する知識の欠如から、その方面のものを盛り込むことができなかつたための欠陥は自らも認識している。近年パーリ・ジャータカを軸に関連資料を多数列挙したグレイの対照表が現れ、文献のみならず造形作品をもその射程にいられているので、我々の知識は増えそうである。<sup>(39)</sup> ただこの対照表は挙げられている項目の相互関係は全く考慮されておらず、ただ並べたに過ぎないものであるので (Excursus 参照)、造形と文献の関係に、ただひとつの視点からであるが、若干の考察を与えてみたい。<sup>(40)</sup>

本話と造形作品の指摘は古くからある。誰が最初に例を指摘したかといった研究史を正確に辿るのは筆者には殆ど不可能であるが、<sup>(41)</sup> 比較的初期のものとして J.Ph. Vogel, "The Mathura School of Sculpture," *Archæological Survey of India: Annual Report 1906-7* [published in 1909], pp.156-157 fig.1 にてマトゥラー美術館所蔵の欄柱を掲げ、パーリ・ジャータカとパンチャタントラの指摘をしている。人が亀を襲っている図柄でありパーリ・ジャータカとは相違するが、仏典と造形の乖離はしばしば見られることであるので、パンチャタントラよりもジャータカに基づいた作品であるという様な口振りである。<sup>(42)</sup> ボードガヤーやチャンディ・ムンドゥ<sup>(43)</sup>にも亀ジャータカを主題にしたことが述べられているので、当時続々と明らかになりつつあったジャータカの造形作品をも考え合わせるのことである。こうした報告をまとめて A. Foucher, "Les représentations de *Jâtaka* dans l'art bouddhique," *Mémoires concernant l'Asie orientale* 3 (1919), 1-52 というのが発表されている点に当時の雰囲気が見える。この論文にはパーリ・ジャータカを軸とした索引が付せられており、ボードガヤー・マトゥラー・ムンドゥ・ナーランダの指摘があり、知識が増大している。更に末尾に図版と解説があるが、ボードガヤーは I, 7 である。ただ結論に異存はないものの、マトゥラーの浮彫は二人の人が亀を襲っている図であり、棒にぶらさがって空を飛行している場面はない。そうした場面と一緒にしている作品と合わせ考えればパーリ 215 番との同定も可能であるが、もし Vogel がこれだけを見て同定したのであれば、かなり大胆な結論であったと言わざるを得ない。亀をいじめている場面だけであれば、浦島太郎の冒頭部でもいいわけである。

ボードガヤーは Foucher よりも早く Vogel 前掲論文に指摘があるのは前述の通りである。J.Ph. Vogel, "Études de sculpture bouddhique," *BEFEO* 9 (1909), 528-529 cum Fig.32 もほぼ同内容である。他に図版はないが、Ernst Waldschmidt, *Grünwedels buddhistische Kunst in Indien*, I. Teil (= Handbücher der Staatlichen Museen zu Berlin Museum für Völkerkunde) (Berlin: Wülfel, 1932), 84 に言及され、Foucher の図版が参照させられている。また Joanna Gottfried Williams, *The Art of Gupta India Empire and Province* (Princeton: Princeton U.P., 1982), p.238 Pl.237<sup>(44)</sup> もある。

ナーランダーは Krishna Deva and V.S. Agrawala, "The Stone Temple at Nalanda," *The Journal of the Uttar Pradesh Historical Society* 23 (1950), p.205 panel 61 cum fig.3 に図版を見ることができる。相応文献の指摘はない。

まとめて複数の造形物を指摘したものに Mary Cummings, *The Lives of the Buddha in the Art and Literature of Asia* (= Michigan Papers on South and Southeast Asia 20) (Ann Arbor: Center for South and Southeast Asian Studies, The Univ. of Michigan, 1982), 24-29.<sup>(45)</sup>

今回の補足の中心はジャワにあるチャンディ・ムンドウの浮彫である。この寺院は八大菩薩像などで有名であるが、基壇に登る階段の外壁に物語の造形化が見られる。完全な研究史は筆者にはわからないが、物語図があることは少なくとも20世紀初頭から気付かれている。<sup>(46)</sup>ボロブドゥルに次いで言及されることの多いこの遺跡と本話に関して、筆者が最初の書誌を作成した頃に相前後して次の研究が現れている。

Akira Yuyama, "The Kacchapa-Jataka in Bas-relief at the Candi Mendut in Central Java," *Studies in Buddhism and Culture: In honour of Professor Dr. Egaku Mayeda on his sixty-fifth birthday* / 前田恵學博士頌寿記念佛教文化學論集 (Tokyo: Sankibo, 1991), 251(530)-265(516).

ムンドウの浮彫を精査した湯山氏はその特徴的な点を列挙し、パンチャタントラ系の文献に見られる本話のリテラル・ヴァージョンと比較し、ぴったりと一致するものがないとしている。これまでパンチャタントラ系文献が扱われる場合、北インド系のものが扱われることが多かった。パンチャタントラの起源は恐らくは北インドで、またそちら方面の伝本も多数存在するからである。しかしジャワへの影響は南インドからであり、そちらの方面へ目配りをする必要がある。湯山氏はエジャートンの再構パンチャタントラを軸にパンチャタントラ系の特徴を抽出するが、北インドの現存伝本でもジャワからは離れてゆくのに、更に架構の伝本を使い益々距離を離してしまった。<sup>(47)</sup> エジャートンの再構の仕事は意義を有するものではあるが、今ムンドウの浮彫との関連を探る場合には、それに目を向けるのは視点が逆の方向を向くことになる。それではいずれの伝本が考察の対象になるべきかという点、ヴァスバーガの系統を体現する『タントローパークヤーナ』<sup>(48)</sup>である。東南アジアにパンチャタントラ系の寓話が流出する際に、この伝本が果たした役割の重さが今日では認められるようになっているが、ムンドウの浮彫を考察するには、ジャワそのものに伝わるヴァージョンを見る方が手っ取り早いであろうし、またそれが自然な考え方である。この点は湯山氏ももちろん認識しているのであるが、実際に利用したのは the Middle Javanese version で、ホーイカースの学位論文に基づいて要約を与えているばかりで、どうして Old Javanese の方を使用しなかったのか理解に苦しむ。こちらの方がホーイカースにより、古ジャワ語・オランダ語の対訳のエディションが刊行されていて<sup>(49)</sup>ずっと利用し易いからである。両者の本文を比較すると、いくらかの違いはあるが全体の結構はそれ程変わらない。<sup>(50)</sup> とはいえインド学者が同時にジャワ学に通暁することは戦前のオランダの学者を別とすれば、殆ど不

可能に近い。それでも近年のオランダにもまだその伝統は残っているらしく、次の論文が現れた<sup>(51)</sup>。

Marijke J. Klokke, "The Tortoise and the Geese: a comparison of a number of Indian and Javanese literary and sculptural versions of the story," in Lokesh Chandra (ed.), *The Art and Culture of South East Asia* (= Sata-Pitaka Series 364)(New Delhi: International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan, 1991), 181-198.

次の論文の本話に関わる部分はこの論文を受けたものである。

Channabasappa S. Patil, "Pancatantra Sculptures and Literary Traditions in India and Indonesia: a comparative study," in Marijke J. Klokke (ed.), *Narrative Sculpture and Literary Traditions in South and Southeast Asia* (= Studies in Asian Art and Archaeology 23)(Leiden: Brill, 2000), 73-95.

これらによればジャワには更に造形の作例が求められ、それらは南インドの造形例からつながるものであることが確認される。それは古ジャワ語『タントリカマンダカ』が南インドの伝本の系統を引くものであるという事実と呼応している。文献の伝承と造形の経路が相応する事例をここに認識すべきである。なお『タントリカマンダカ』所収話の和訳は公開されている。<sup>(52)</sup>

### Excursus: グレイのジャータカ対照表について

ジャータカは物語の宝庫である。集成としては一番大きなパーリ・ジャータカを軸に平行する物語を各話ごとに記載してゆけば、仏教学のみならず昔話研究にも資するところ大である。そうした試みはいくつかなされてはいたが、干潟龍祥『本生経類照合全表』でひとつの頂点を迎えた。部分的な追加や補正は可能であろうが、これ以上包括的なものは早々には現れないであろうと思っていた。その新版の試みが日本ではなく、英国でなされた。すなわち次のものである。

Leslie Grey, *A Concordance of Buddhist Birth Stories*. Oxford: Pali Text Society, 1990; 2nd ed. 1994; 3rd ed 2000.

初版が出た折りにも反響があったが、編者はそれに満足することなく、4年後の1994年に大幅な増補を企て、更なる徹底的な改訂の遂行は2000年の第3版に結実する。10年に及ぶ改訂の努力には敬意措くあたわざるものがある。以下の議論はもっぱらこの第3版に対して行う。540を超えるパーリ・ジャータカの各話の鍵となる単語を見出しにして順序を組み替え、それぞれに膨大な文献を当たって、関係する物語、のみならず同一／類似の主題を用いた造形作品を指摘し、主として著者／編者のアルファベット順に配列してゆく。従って利用者は絶えず巻末の文献リストを参照することを強られるが、とにかく編者の努力と勤勉に敬意を惜しむものではない。と同時にその労力が一次資料の言語の学習に注がれるのがより

正当であったと遺憾ながら主張せざるを得ない。この対照表を一瞥すれば編者が扱われている資料が書かれている言語、すなわち古典語のいずれにも通じていないことが明かになる。近代語訳・抜粋集・要約集を掻き集めて脈絡なくつないでいったことがどうしても見えてきてしまう。上に言及した「カメの空中飛行」を例にその事情を見てみよう。

カメの登場する物語はパーリ・ジャータカだけでもいくつもあるので、編者は KACCHAPA の見出し語に更に番号を付けて下位区分を試みる。上の物語に対応するものは KACCAPA-II (pp.138-140) である。Davids,<sup>(53)</sup> Fausbøll, Francis, Khan, Lüders, Mehlig, Terral はいずれもパーリ・ジャータカの訳（または自由訳）であるから、標題の CJ などと並べた方がすっきりとする。<sup>(54)</sup> Burlingame はパーリ語『法句経註』の英訳であるが、ジャータカとしての枠組みのみを欠くも物語そのものはパーリ・ジャータカの本文とほぼ同一なので、ここに付加的に置くとよい。もっともパーリ語原文を読まないのであれば、この事実には気付かないかもしれないが。Chavannes 131 と Julien 6<sup>(55)</sup> は離れて別の頁に置かれているが、共に『旧雑譬喩経』収載の一話の訳であるので一括して呈示すべきである。というより漢文資料の題名を挙げた上で、大正大藏経の巻頁段<sup>(56)</sup>を記してから訳を列挙すべきであり、そのスタイルの例は筆者自身のリストが示している。Chavannes 395 と Panglung が同じ根本有部律中の一話のそれぞれ漢訳と西藏語訳であることを示すのを編者に望むのは無理であろうか。パンチャタントラ系のパラレルは重要であるのに、Benfey, Edgerton, Johnson, Penzer だけしか挙げないという偏りを見せている。巻末の文献表には Hertel の書も挙がっているのだが、<sup>(57)</sup>梵語はもとより、英語以外の外国語は現代語といえども不得手の様で、該当話を見つけることはできなかったものと思われる。パンチャタントラ系を一括して挙例したらそれと接続して Kalilah wa-Dimnah 系の Atil, Grube, North, Wood を並べるべきであるが、とにかく組織的に整理して挙げる必要がある。その場合には僅かこの4点では絶対に不足であることは言うまでもない。失われたパーラヴィー語版に近いアラビア語版と（シリア語古訳は無視されている）、恐らくはそこからの派生の最も西にある North を挙げながら、その両者の間に介在する各国語版については如何に考えているのだろうか。Hadas, Schwarzbaum は離れて置かれているもののそれぞれベレキア・ハ・ナクダンの寓話集の英語訳と研究であるが、文献表にはそのヘブライ語原典が挙げてあるのに、ここに引いていないのは、ヘブライ語が読めないというのもさりながら、それぞれの書がいかなるテキストを扱っているかということへの理解がまるでないためである。造形作品の挙例についても同様で、Candi Mendut（文献表になし）、Kersjes, Yuyama は同じ造形物を扱ったものである。

引かれている Jones は編者にはわからないかもしれないが、わが国の『今昔物語集』の抜粋英訳である。原典への指示は望むべくもないが、もっと良質の西欧語訳もあることは筆者の書誌を見れば明らかである。

初めジャータカのコンコーダンスと題名だけ聞いたときには、ジャータカの偈のパラレル



を博搜して呈示したものではないかと想像したが<sup>(58)</sup>、実際に同書を繙いてみると、上に述べた様な具合で二次資料を適当に掻き集めて並べただけの浅薄なものであった。干潟博士の全表を英語に移し替えればずっとましなものが出来たと思われる。この干潟博士の業績は文献表にもあるが、"Hikata, Ryushs and S. Matsubara: Honjs-Kysrui No Shisshiteki Kenkyu, Tokyo Bunko, Tokyo, 1954" といった様な奇妙な引き方<sup>(59)</sup>をしている程で、その内容から益を蒙っていることはまるでなかったのは遺憾なことである。一次資料を読む意欲も能力も欠如している者がこの種のを編纂するのは、適材適所というのには程遠いというのが真相であった。<sup>(60)</sup>

## XLI. ランプシニトス宝蔵譚補足

4月からSOASの所属になり、文献参照が少しやり易い状況になったので、散発的ではあるが、気の付いたものは書き留めておきたい。シーフナーのものは帝政ロシア時代の雑誌に発表されたのであるが、流石にその雑誌は所蔵されていなかった。しかし同誌のアジア関係のものは抜粋されて合冊された定期刊行物があり、そちらは所蔵されていた<sup>(61)</sup>。取り敢えずこのテーマのものをメモしておこう。

A. Schiefner, "Über einige morgenländische Fassungen der Rhampsinit-Sage," *Mélanges asiatiques* 6 (1870)[published in 1873], 161-186 [originally published in *Bulletin de l'académie impériale des sciences de St.-Pétersbourg* 14 (1870), 299-316].

シーフナー<sup>(62)</sup>はこの雑誌に律蔵から多くの物語を抜粋してそのドイツ語訳を連載しているので、そこから予想される通り、先ずはカンギュルにこのヘロドトスの伝えるランプシニトス王の宝蔵破りの物語に対応するものがあることが紹介される。西藏文の忠実なドイツ語訳が与えられた後、『カターサリットサーガラ』中の対応話がこれまた忠実な訳文によって披露される。ガストン・パリスの記念碑的な労作のかなり前に、東西を繋ぐ糸は帝政ロシアで既に想定されていた。

## XLII. 中世動物誌「蟻」——テオバルドゥス——

中世動物誌が我が国で言及されることは皆無ではないにしても、決して頻繁ではなかった。筆者は「「蟻」中英語版『動物誌』より」『英文学から八雲学へ：榊井幹生先生退官記念論集』（京都、1998）、146-154にて「蟻」の章の成り立ちを考察した。同時に『動物誌への基礎づけ』（=プリンス通信・Beiheft 36）(1999)を編みながらも、本来参照すべき文献を容易に閲覧できる環境にはないことを嘆くばかりで、研究史を隈無く辿りながら一次文献の概観を得ることができない状況に甘んじたままであった。

とりわけ致命的であったのはテオバルドゥスのラテン語本の重要さ<sup>(63)</sup>を知りながらも原文

を参照できずに留まったことであった。このたび稀覯本というわけでもなく標準的な大学図書館であれば備わっている次の書の閲覧の機会を得たので、上の欠を補うべく「蟻」の章の拙訳を記しておきたい。

P.T. Eden, *Theobaldi 《Physiologus》* (= *Mittellateinische Studien und Texte* 6)(Leiden: Brill, 1972), 40-43.

#### IV. 蟻

蟻は我等に労働の手本を提供する、1  
通常食物を口に運ぶ時に。  
その行為のうちに精神的なことがらを示すが、  
それはユダヤ人が好まないものである。そのために [ユダヤ人は] 非難さるべき存在である。  
来るべき冬にも憂い無き様力を蓄えるべく、5  
暖かい間にも休みはしない。  
はらからよ、我等は時を持つ間に働こうではないか、  
審判の時に憂い無き様に。  
蟻は穀類を集める。もし大麦を見付けたなら蔑視する。  
「私自身は新しい法を集めているのであって、古いのをではない」と。10  
しかし雨に濡れて湿った [穀類] は発芽しない。  
蟻が減びることもない、そこから食べることができないから。  
蟻は集めた穀物を思慮深く二分する。  
これは即ち一つの法は二様の意味を持つということである。  
地上の響きをしているものはまた同時に天界の様相を呈する、15  
今心を養い、今身体に滋養を与える。  
我等に [次のことが] 満たされる様に、飢餓の怖れが去らんことを、  
冬にも似た審判の時に。18

#### 註

(1) 従って暫く中断していたインド学雑録オムニバスの線上に置くこととした。インド外のものを扱っていても、大きな視点の中心はインドに据えられているからである。今回のものはいずれも補足の形を採っているため、各テーマの論述としてはバランスを欠いたものである。オムニバスのこれまでの発表場所は以下の通りである。

- I～VIII『(神戸)親和女子大学研究論叢』24(1991), 27-87; IX～XIII同25(1992), 136-202; XIV～XVIII同26(1993), 78-113; XIX～XXII同27(1994), 66-121; XXIII～XXVI同28(1995), 32-70; XXVII～XXXI同29(1996.1), 26-79; XXXII～XXXV同31(1998.2), 267-296; XXXVI:同92-104.
- (2) 「道徳劇『万人』の東洋的材源」(= Anal. Ang. I)『英語英文学』13(1993.12), 58-73; "An Indian Source of Everyman," *Proceedings of the Fourteenth International Symposium on Asian Studies*, 1992, 387-394.
- (3) 「ジャイナ教所伝説話の流布の経路についての問題点」『ジャイナ教研究』7(2001), 55-63. Cf. also "Reconsideration on the Route of Transmission of the Jain Stories." International Seminar on Anekanta: a Dialogue on Human Concerns, organised by Jain Vishva Bharati Institute. Pratap Vilas Palace, Vadodara. 8 Dec. 2002.
- (4) 引用する書籍のタイトルページにヘブライ文字の表記がある場合にはすべてローマ字転写とし、また付加符号は省いた。この不正確さの欠は『プリンス通信』の対応する記事中にヘブライ文字で与えて補うこととする。またサンスクリットその他のローマ字転写の付加符号も文字化けを恐れて省いてある。
- (5) 英語諺 A friend in need is a friend indeed も添えられることがあるが(初出は Proverbs of Alfredらしい)、ネット諺掲示板2005年3月15日09時の投稿には同趣旨のベンガル語の諺が、17日12時の投稿ではフィリピン語の諺が紹介されていた(いずれも過去ログ集第VIII集に収録される筈)。後者は Sa panahon ng kagipitan, nakikilala ang kaibigan. (必要としている時に、友が誰かがわかる)。英語と同じく韻を踏んでいるこの諺の起源がどこにあるか調べるのも、フィリピンまでBJが伝わっている事実とも考え合わせると、興味ある作業となろう。
- (6) 「[妻子珍宝及王位]の偈をめぐって」『印度學佛教學研究』50-2 [100] (2000.3), 714(186)-720(192).
- (7) L. Sternbach (ed.), *The Vyasa-subhasita-samgraha* (= Kashi Sanskrit Series 193)(Benares: The Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1969), vs. 7.
- (8) "Le lai de l'oiselet in Oriental Literature," *Handbook of Asian Studies Association of New Zealand* (Auckland, 1979); 「物語伝播における仏典の役割——「小鳥の教訓」を一例にして——」『日本仏教文化研究』3(1982), 108-126 = 『四天王寺』501(1982.9), 38-56; "Le lai de l'oiselet in Oriental Literature," *Kalyana-mitta: Professor Hajime Nakamura Felicitation Volume* (= Bibliotheca Indo-Buddhica 86), ed. by V.N. Jha (Delhi: Sri Satguru Publications, 1991), 1-14. 「ガストン・パリシと物語インド起源説」(= Anal.Ind. IV)『親和女子大学研究論叢』24(1991), 51-56にも近世日本の文献からの補足がある。
- (9) この書は100頁を越す序文の後にニダーナカターと1番から40番までのジャータカ註の英訳が続く(序の中にサンプルとして189, 215, 294, 186, 151番と Mahosadha-Jの(部分)訳がある)。第I巻とあるので、41番以降の訳も予定されていたのであろうが、実際にはこの巻しか出なかった。Cowell & Francisの訳もほぼ同時進行だったので、そちらに譲ったのであろう。
- (10) 恐らくは Vol.V, p.80 ということなのであろうが、そこは No.523 Alambusa-Jataka の英訳の箇所であり、Isisinga に脚註が付いていて、Ramayana I, 9 と Jacobs の BJ が参照されているだけであるから、BJに関わる物語の変遷を知るために役立つための挙例としては不適である。
- (11) キャンベルがひたすら依ったとする Rhys Davids の p.xxxvii n.2 には著者をダマスクスのヨハネとする説が紹介されているが、この書もその説も19世紀のものである。研究史を無視してはいつまでも黴の生えた議論をなぞるばかりになる。
- (12) 例えば註29では Th. Benfey, "Three Wisdoms ...," *The Panchatantra ...* とドイツ語の書名が勝手に英語

に置き換わっている。また綴りも正しくない。

- (13) 正直に告白すると筆者も直接にはこの書を披見したことはなく、例えば Hiram Peri (Pflaum), *Der Religionsdiput der Barlaam-Legende, ein Motiv abendluändischer Dichtung (Untersuchung, ungedruckte Texte, Bibliographie der Legende)* (= Acta Salmanticensia, Filosofia y Letras, tomo XIV núm.3)(Salamanca: Universidad de Salamanca, 1959), S.229 = Nr.53 等を通じての間接的知識に過ぎない。Yule はマルコ・ポーロの訳註にて西洋化された伝について小論文程の長さの詳註をものしているが、その中にコウトウの記述の抄訳を与えている。Henry Yule, *The Book of Ser Marco Polo: the Venetian concerning the kingdoms and marvels of the East*, 3rd ed., vol.II (London: John Murray, 1903), 321-328. Cf. also Henri Cordier, *Ser Marco Polo: notes and addenda to Sir Henry Yule's edition, containing the results of recent research and discovery* (London: John Murray, 1920), 111-112. 余談ながら SOAS 図書館所蔵の Peri の書 [書架番号: A294.363/142441] は、著者自身から D.M. Lang に献呈され、更に Lang から図書館に寄贈されたものである。この献辞の筆跡は『プリンス通信』551号 (July 2005), § 1009 に複写を与えてある。なおマルコ・ポーロと BJ は "Bauduin de Sebourg" を介して関連することが知られているが (Wilhelm Kleinschmidt, *Das Verhältnis des "Bauduin de Sebourg" zu dem "Chevalier zu Cygne", "Marco Polo", "Barlaam et Josaphat" und den Fabliaux* (Göttingen, 1908 [Diss.]、東西交流史上に果たした中東の重要な役割が確認される。
- (14) 誰が最初に主張したのか未だ確かめ得ない。案外アルビールーニーあたりかもしれないので、アラビア語原書の確認が望まれる。Cf. H. Yule, "Buddha and St. Josaphat," *The Indian Antiquary* 12 (1883), 288-289.
- (15) M. Gaster, *op. cit.*, p.256. ガスターの書に収録されたエクセンブラの多くは英文とヘブライ文が掲載されているが、残念ながら本話は英文のみでヘブライ文はない (v. supra)。
- (16) 従って103頁15行目の "Way's "Lay of the Little Bird," included in Gesta Romanorum" という言はこれ以上ないという程の大きな誤りである。
- (17) 古いとはいえ今なお標準的な概説は Bernhard Heller, "Das hebräische und arabische Märchen," in Johannes Bolte und Georg Polívka, *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm* 4. Bd (Leipzig: Dieterich, 1930), 315-382. BJ に関しては 358.
- (18) 近年出版されたアラビアンナイト百科事典では、この部分に414番の番号を与えている。Ulrich Marzolph and Richard van Leeuwen, *The Arabian Nights Encyclopedia*, 2 vols. (Santa Barbara: ABC-CLIO, 2004), esp. II.445-446.
- (19) 前半の部分は AT 245 に相当するものである。また AT 68 も関連する。
- (20) ただしこちらの系統でもどの伝本にもあるという訳ではなく、このサンスクリット本以外の東南アジアの伝承については、Louis Finot, "Recherches sur la littérature laotienne," *BEFEO* 17 (1917), 108.
- (21) George T. Artola, "Ten Tales from the Tantrokyana," *The Adyar Library Bulletin* 29 (1965), 30-73. なお editio princeps の該当箇所は、K. Sambasiva Sastri (ed.), *Tantrokyana* (= Trivandrum Sanskrit Series 132)(= Sri Citrodayanajari 21)(Trivandrum: Government Press, 1938), 38.23-39.25.
- (22) Varadraj Huilgol, *The Pancatantra of Vasubhaga: A Critical Study* (Madras: New Era Publications, 1987), 83 にも本話への言及があるが、やはりヴァスバーガ系だけにあつて北方伝承に欠くものという扱ひである。分類はそのようでもよいかもしれないが、上記のものが同一相型には遡らないとしても、類似があることの注記は必要である。
- (23) この詩句は筆者が最初に指摘した Textus Ornatior と Simplicior H の詩句と完全に同一であるというわ

けではないが、同一の祖型に由来することは明かである。これに伴う物語はおおまかには類似であっても同一と見なされる程ではない。詩句と物語の関係を再考するひとつの材料となろう。なお Ornator の詩句は次の通り。

purvam tavad aham murkho dvitiyah pasabandhalah /  
tato raja ca mantri ca sarvam vai murkhamandalam //

(Johannes Hertel, *The Panchatantra ... Purnabhadra* (= Harvard Oriental Series 11)(Cambridge, Mass., Harvard U.P., 1908), III.193 = pp.216.21-22)

- (24) Gilgit Ms, folio 272v.
- (25) H 161v3.
- (26) この稀観本はロンドン大学セネトハウス図書館に所蔵されているが、署名によりモーゼス・ガスターの旧蔵書であったことがわかる。この筆跡は『プリンス通信』552号 (June 2005), § 1013 に複写してある。
- (27) 冒頭に言及したベレキア・ハ・ナクダンの寓話集にも収録されている。和訳と註は計画している全訳に譲る。
- (28) 東洋起源の物語が直接にはアラビア語が基となってスペインに受容された文献に対する概観は、Ángel González Palencia, *Historia de la literatura arábigo-española* (= Colección Labor, sección III Ciencias Literarias No. 164-165) (Barcelona: Labor, 1928; 2da ed. 1945), 334-348. 特にカリエラとデムナについては、335-336.
- (29) 「イベリア半島における文化接触」(1)(2) 081802. やがて過去ログ集に印刷される筈である。
- (30) Vasudev Gopal Paranjpe (ed.), *The Striparvan* (Poona: BORI, 1956), 19-24. プーナ批判版が完結してからは専らこのエディションに基づいて論じられることが多くなった。筆者のリストもそうであったが、この際他のエディションの該当箇所も記しておこう。Pratapa Chandra Roy, *Stri Parva* (Kalikata: Srikalidasa sevena mudritam, 1811), 9-11; T.R. Krishnacharya & T.R. Vyasacharya (eds.), XI (Bombay: Nirnaya-sagar, 1907), 6-7; P.P.S. Sastri, XII (Madras: V. Ramaswamy Sastrulu & Sons, 1935), *Striparva*, pp.17-22.
- (31) 抜粋訳に本話が選ばれていることにもその関心の強さが窺える。池田澄達『マハーバーラタとラーマヤナ』(東京：日本評論社, 1944), 186-210; Louis Renou, *Anthologie sanskrite* (=Bibliothèque historique)(Paris: Payot, 1947), 107-109; Wolfgang Morgenroth, *Das Schlangenopfer: Geschichten aus dem Mahâbhârata* (Berlin: Rütten & Laening, 1987), 278-280. 全訳もしくは全訳を志向しているものには当然のことながら、含まれている。しかし訳註にて本話を論じたものはない。Pratap Chandra Roy, *Stree Parva* (Calcutta: Bharata Press, 1890), 10-12 = VII (Calcutta: Oriental Publishing, s.d.), *Stree Parva* 8-9; Manmatha Nath Dutt, (Calcutta: Kash Mohun Sircar, 1902), *Stree Parva*, pp.5-6; E. Л.Смирнов, вып. 8 (Москва, 1982), 95-96; James L. Fitzgerald, 11 & 12 (Chicago: The U. of Chicago P., 2004), 37-39. [Summ.] Hermann Jacobi, *Mahabharata* (Bonn: Friedrich Cohen, 1903), 124.
- (32) 既に以前にも記したところであるがその後新訳もでたので原書も含めて再度記しておこう。M. Winternitz, *Geschichte der indischen Litteratur I* (= Die Litteraturen des Ostems in Einzeldarstellungen 9), 2. Ausg. (Leipzig: C.F. Amlangs Verlag, [1907]), 351-352; *A History of Indian Literature I*, tr. by S. Ketkar (Calcutta: U. of Calcutta, 1927), 408-409; *A History of Indian Literature I*, tr. by V. Srinivasa Sarma (Delhi: Motilal Banarsidass, 1981), 393-395. 同じ著者は他に *Some Problems of Indian Literature [Calcutta University Readership Lecture, 1923]* (Calcutta: Calcutta U. P., 1925), 28-30 でも

論じている。なお *Ascetic Literature in Ancient India*, 28-30 にも言及があるらしいが未見。

- (33) 長尾雅人『大乘仏典』7 (東京: 中央公論社, 1974), 30; Robert A.F. Thurman, *The Holy Teaching of Vimalakirti: A Mahayana Scripture* (= IASWR Series)(University Park: The Pennsylvania State U.P., 1976; rpt. Delhi: Motilal Banarsidass, 1991), 22; 幼存・道生『維摩詰經今譯』(北京: 中国社会科学出版社, 1994), 114; Burton Watson, *The Vimalakirti Sutra* (= Translations from the Asian Classics)(New York: Columbia U.P., 1997), 35. [前2者は西蔵訳から、後2者は羅什訳が底本である]
- (34) Étienne Lamotte, *L'enseignement de Vimalakirti* (= Bibliothèque du Muséon 51)(Louvain, 1962), 135 cum n.; *The Teaching of Vimalakirti* (= Sacred Books of the Buddhist 32), tr. by Sara Boin (London: PTS. 1976), 36 cum n.27.
- (35) Zayton の仏塔中の浮彫の場面に関連する文献を Demiéville は詳細に述べていて極めて貴重な貢献になっている。本話に関わる浮彫には「丘井狂象」の銘文がある。それに対する Demiéville の記述には若干の混乱がある。漢文仏典の書名を挙げる所で次の様に述べている。"There are at least four versions of this story: (1) in 賓頭盧突羅闍爲優陀延王說法經, T.1690, p.787; (2) in 衆經撰雜譬喻經, T.208, Ch.I, p.533; (3) in 佛說譬喻經, T.217, p.801; (4) in 經律異相. A fifth version, in which the man is sated by a Deva, is quoted in T.2121, Ch. XLV, pp.223c-224a." (4) だけ大正番号と頁数が挙がっていないのが奇妙である。そして5番目のものとして挙げている T.2121 は他ならぬ『經律異相』であり、巻数頁数は間違っている。正しくは巻第四十四で大正53.233c28-234a10である。つまり(4)と(5)は同一のものである。しかも『經律異相』はほとんどが先行文献からの抜き書きから成り、各引用文の末尾には出典名が記されている。今問題にしている箇所末尾には「出譬喻經第七卷」とある。しかし引用されている文は(3)の本文とは異なるし、(3)はそもそも一卷本である。譬喻經類には様々な文献が群をなして存在していた様であるから、經録の記載やこうした逸文を集めて、今は失われたものをも含めて全体の様相を再構する必要がある。cf. CCC II の序; 林屋友次郎『異譯經類の研究』(東洋文庫, 1938). なお(2)のフランス語訳は CCC No 205 に (4) は No 469 に見られ、(3) のそれは No 469 の補注中に与えられている (IV.236-238)。CCC IV 巻頭の Sylvain Lévi の序によれば補注中の訳の作成は Demiéville らしいのでよくよく奇妙である。恐らくは大正大蔵經を横に置きつつ書いたのではなく、不備のあるメモか記憶に基づいたためであろう。
- (36) [Ed.] Sanghadasagani, *Vasudevahindiprathamakhandam I*, ed. by Caturvijaya & Punyavijaya (= SriAtmananda Jainagrantharatnamala 80)(Bhavnagar: Sri Jaina-Atmanandasabha, 1930), 8.4-23. [Tr.] Bhogilal Jaycamdabhai Samdesara, *Vasudeva-hindi* (= Vakil Kesavalalbhai Premcand Granthamala 1)(Bhavnagar: Sri Jaina Atmanand Sabha, 1946), 10-11; Jagdishchandra Jain, *The Vasudevahindi: an authentic Jain version of the Brhatkatha* (= L.D. Series 59)(Ahmedabad: L.D. Institute of Indology, 1977), 560-561. なお Sten Konow, *En Bunt Indiske Eventyr* (Oslo, 1946) は紛失のため今回披見できず。
- (37) エヴリマンの類話の項で述べたのと同じことであるが、緊密な対応を示す場合に、共通の起源に遡ることを考えるのが手順であるが、また一方であまりに緊密な対応の場合には後代の借用関係の可能性をも見据える必要がある。
- (38) 「カメの空中飛行」書誌 (= Anal.Ind. XI) 『親和女子大学研究論叢』25 (1992), 165-185. 以後ウイグル語の類話の指摘などの補足が多数あるも、在外のため手許にないので記すことができない。数年前に湯谷拓三氏により中国資料をも用いた新研究が出現したので、2003年10月11日比較文化学部主催の公開講座の折りの配付資料として作成した『インド起源の東西説話』(= プリンズ通信・Beiheft 50)(Tama: Omega Verlag, 2003) にて同氏の研究にも言及した。これが一番最後の補足にあたる。

- (39) 増えていない例もある。Joachim Kühn, "Fliegen lernen," *Enzyklopädie des Märchens* 4 (Berlin: Walter de Gruyter, 1984), Spal. 1290-1295 では本話を "Das buddhist. Exempel" の項目のもとに、イソップ系のものとは別立したことは評価できるが、この項目ではパーリ・ジャータカ215のみを挙げ、パンチャタントラ系を見落としている不備がある。更に悪いことにラ・フォンテーヌが再話した以外には西洋に全く影響を及ぼさなかったと事実と相違することが書いてある。東洋文学への無知もさることながら、ラ・フォンテーヌが何に基づいて再話したかを知っていれば上の発言はでてこなかった筈であるので、西洋文学の知識も欠如していることが露呈している。玉石混淆の同事典の項目記事の〈石〉を代表するものである。事典の後の巻でこの項目を参照させているが (Grotzfeld und Marzolph, "Kalila und Dimna," 7 (1993), Spal. 888-895)、そこでは各所に影響を及ぼした書に収録されていることを記述し、参照項目とは齟齬しているのでそちらの執筆者はまずいと思ったことであろう。
- (40) かつて「ジャータカと造形美術について」 (= Anal.Ind. XVI) 『神戸親和女子大学研究論叢』 28 (1995), 64-70 と題して記したことがあったが、フシェの和訳本が出たことをきっかけに書いた随想的なもので極めて不十分なものである。
- (41) 湯山氏は以下で引く論文 p.259 n.8 で1901年頃のものとして J. Brandes, "Opmerking aangaande een relief aan den buitenkant van de trap van de Tjandi Mendoet" を未見ながら関係論文であろうとしている。この未見論文については N.J. Krom, *Inleiding tot de Hindoe-Javaansche Kunst*, I. Deel ('s-Gravenhage: Martinus Nijhoff, 1923), 329 の文献リストを参照させているが、同頁には斯上のタイトルは挙げられてはいない。このリストは当時の雑誌論文を網羅したものである。ただしオランダ外では見ることがそれ程容易でないものが多いのでその点でも貴重である。
- (42) J.Ph. Vogel, "Études de sculpture bouddhique," *BEFEO* 9 (1909), 528-529 cum fig.32 でも同じ主旨を述べている。
- (43) 典拠として引かれているのは Kersjes en Den Hamer(後引)であるが、同書では文献の指摘がないので、ジャータカとの同定は Vogel 独自のものである。
- (44) 但し p.151 n.156 にて "Pali Jataka, No.178" とするのは誤り。178番も亀ジャータカではあるが別の物語である。本話は215番である。このように美術史家はしばしば文献を読まないまま引用することがあるので、読者は気を付けなくてはならない。
- (45) 関連するふたつの図版のうちひとつはチャンディ・ムンドゥであるが (Pl.2)、もうひとつ (Pl.3) はジャータカの再話本の近代の画家の挿絵の複写であり、美術史に資するところは乏しい。文献の列挙はまばらで、造形作品として指摘されるのは、マトウラー、チャンディ・ムンドゥ、ボードウガヤー、室町期の青銅鏡であり、文献との相応は全く考察されていない。
- (46) 例えば B. Kersjes en C. Den Hamer, *De Tjandi Mendoet voor de restauratie* (Batavia: Albrecht, 1903), pp.9-10 cum Plaat 13 [Den Hamer 執筆]。ただし相応する文献の指摘はない。なお Grey の "Kersjes (1905) P.9 Pl 15" は誤り。前述の如く文献との相応は Vogel の指摘が最初の様である。なおチャンディ・ムンドゥの彫刻は八大菩薩を初めとする尊像が主要であるが (経典儀軌との詳細な比較研究が松長恵史『インドネシアの密教』(京都:法蔵館, 1999), 53-128 に見られる)、時折この物語のレリーフが言及されることもある。Jacques Dumarçay, *Borobudur*, ed. and tr. by Michael Smithies (Kuala Lumpur: Oxford U.P., 1978), 37 はパンチャタントラと La Fontaine に関連させ、後者の基が1670年の Bernier の書であるとしている。伊東照司『インドネシア美術入門』(東京:雄山閣, 1999), 28-29 cum pl.31 は『旧雑譬喻経』のみを挙げている。
- (47) これには致し方ない面がある。パンチャタントラ研究の大半は北方伝承の方に目が向いていたからで

ある。系統研究については原パンチャタントラからの派生関係を示す系統樹を作成することが主眼となるが、その際扱われるのはいずれも北方伝承ばかりで、南方所伝のものは考慮の外に置かれるのが通例であった。筆者が最初の書誌を作成した時も資料と知識の不足から、気にはなりながらも以下に触れることになる南方伝承を列挙することはできなかった。それ以後に現れた訳を補足として列挙しておくが（及び当時見落としたものをも）、いずれも北方のものである。尚本話の該当箇所も括弧内に記しておこう。 *Tales from the Panchatantra*, tr. by Alfred Williams, illust. by Peggy Whistler, intr. by A.A. Macdonell (Oxford: Blackwell, 1930) [< Tantrakhyayika, pp.34-36]; *Pantschatantra: Das Fabelbuch des Pandit Wischnu Scharma*, übst. von G.L. Chandipramani (Düsseldorf: Eugen Diederichs, 1971) [< D.D. Kosambi, NSP ed, pp.56-57]; *Pancatantra: Die fünf Bücher indischer Lebensweisheit*, mit Zeichnungen von Josef Scharl, hrsg. von Aloys Greither (München: Beck, 1986) [< Benfey = Simplicior H, pp.60-62]; Manoj Das, *Bulldozers and Fables and Fantasies for Adults* (=New World Literature Series 26)(Delhi: D.K. Publishers 1990), 77-82 [retelling]; *Visnu Sarma, The Pancatantra*, tr. by Chandra Rajan (= Penguin Classics)(New Delhi: Penguin Books, 1993) [< Purnabhadra, pp.132-133]; *Viisi Kirjaa Viisaita Satuja: Intialainen Pancatantra*, suom. Virpi Hämeen-Anttila (= Suomen Itämaisen Seuran Suomenkielisiä Julkaisuja 24)(Helsinki: Suomen Itämainen Seura, 1995) [< Purnabhadra, pp.78-79 = I.18]; *Pancatantra: The Book of India's Folk Wisdom*, tr. by Patrick Olivelle (= Oxford World's Classics)(Oxford: O.U.P., 1997) [< Reconstructed, pp.51-52]. 最後者が最新であるだけに一番期待が大きかったものの、実際には一番価値の低いものであった。底本の選択にそのことが如実に示されている。Edgerton の再構の試みは諸伝本の派生関係を考える上での作業であり、それ自体興味或る作業ではあっても、現実には伝承されているパンチャタントラとは一線を画すべき philologische Spielerei の域をいづるものではない。現実には伝わる重要な伝本の中でも現代語訳のないものも多々あるし、またドイツ語訳のみで英語訳がないものをも考慮にいれば更にその数は増す。逆に再構版は再構梵文に続いて英訳は第2巻となって現れたし、その英訳だけが別立されて再刊もされていることは筆者の書誌にもある通りである。要するに既存の英訳のあるものからの選択というのが本音であろう。Edgerton が再構の作業をしていた時点では南方伝承の諸本について充分知られていなかったし、ヴァスバーガ系の出現により、再構の際に描かれていた系統図も再検討を要するものとなった。再構の試み自体その意義の有無が問われねばならない現在、またぞろその英訳を最新訳として世に送る神経には首を傾げざるを得ない。p.xlvi にてこの訳は文献学者のためではなく一般の読者のため、といった言い訳がましい文があるが、再構テキストは一般読者のためのものではなく、文献学者に問うものであるから、この訳者はパンチャタントラの伝承については何もわかっていないことになる。それが証拠に p.xlii で南方伝承についてちょっと触れようとしているが、言語不明瞭意味不明で、何が言いたいのかとんとわからない。参考文献には南方伝承の研究に重要な貢献を多々した Venkatasubbiah のものがひとつも挙がっていない。Venkatasubbiah はパンチャタントラのインド諸語版が重要であるといった Hertel の言葉を尊重しながらも、南方伝承の資料を十分に熟知していない従前の研究を改める必要を主張していると同時に、再構テキスト自体にも疑義を呈している。こうした論文は都合が悪いから隠蔽したのか、或いは単なる無知の故なのかはわからない（多分後者であろう）。最後に再構形がどの伝本よりも美しいと言った Edgerton の言葉を鸚鵡返しに繰り返しているが、当時と今では状況がまるで違う。印欧語比較文法勃興の頃は再構形にロマンがあったが、今日 Schleicher の再構形による寓話を翻訳する人はいない。虚構の抽象よりも、実際に人々が、名もない民衆が愛好し、伝承してきたものの方が美しいのである。



なおカリーラとディムナ系の補足は多々しなければならない。近年インド・アラブ世界の両方を視野に入れた研究が出現した。Yuka Iwase, *Development of Selected Stories from the Pancatantra / Kalilah wa Dimnah: Genealogical Problems Reconsidered on the Basis of Sanskrit and Semitic Texts* ([Minoo]: Osaka University of Foreign Studies, 1999)[Diss.] それによれば今までアラビア語カリーラとディムナの代表的刊本として扱われていたアッザーム本とシャイフー本もその基づいた写本の系統の違いを反映しているということであるので、インド内伝承の様に更に下位区分が必要になってきたからである。近年の François de Blois, *Burzoy's Voyage to India and the Origin of the Book of Kalilah wa Dimnah* (= Prize Publication Fund 23)(London: Royal Asiatic Society, 1990) の様に精密な研究になってきているし、またこの系統の諸写本のリストの作成は大分と前に G. Artola, "Bidpai's Manuscripts from Istanbul and Teheran," *The Adyar Library Bulletin* 21 (1957), 37-53 によりなされている。従って、補足はこうした事情を踏まえて組織的になされるべきであるが、これは筆者の能力をはるかに超えることがらなので、ここでは学習用の読本に本話が採用されていることを付記するだけにとどめる。Munther A. Younes, *Tales from Kalila waDimna: An Arabic Reader* (New Haven: Yale U.P., 1989), 94. なおカリーラとディムナの新しい訳と再刊を追加しておく。Калида и Димна, пер. Б. Шидфар (Москва: Художественная литература, 1986); *Kalila und Dimna: Die Fabeln des Bidpai*, übst. von Philipp Wolff, Nachwort von J. Christoph Bürgel (= Manesse Bibliothek der Weltliteratur)(München: Manesse Verlag, 1999) [< de Sacy ed.].

- (48) この系統に最初に注目したのは恐らくは A. Venkatasubbiah, "The Pancatantra of Durgasimha," *Zeitschrift für Indologie und Iranistik* 6 (1928), 255-318; 7 (1929), 8-32 であり (cf. also "The Pancatantra of Vasubhaga," *The Indian Historical Quarterly* 10 (1934), 104-111)、George T. Artola がケララにある写本を調査した。"Pancatantra Manuscripts from South India," *The Adyar Library Bulletin* 21 (1957), 185-262. 既に K. Sambasiva Sastri, *The Tantropakhyana* (= Trivandrum Skt Series 132)(Trivandrum: Government Press, 1938) は現れたものの、Artola は抜粋エディションと研究を公刊した。"Ten Tales from the Tantropakhyana," *The Adyar Library Bulletin* 29 (1965), 30-73. その結果、タミル本はもとより、インド外のジャワ、ラオス、タイのパンチャタントラ系の伝本と比較考察するのに重要な位置を占めることが確認されている。ただし *Bharatiya Vidya* 20/21, 76-95 所収のものは未見。
- (49) C. Hooykaas, *Tantri Kamandaka: een Oudjavaansche Pantjatantra-Bewerking in tekst en vertaling* (= Bibliotheca Javanica 2)(Bandoeng: Nix, 1931), 112.1-116.8
- (50) 他に Mary S. Zurbuchen, *Introduction to Old Javanese Language and Literature: A Kawi Prose Anthology* (= The Michigan Series in South and Southeast Asian Languages and Linguistics 3)(Ann Arbor: Center for South and Southeast Asian Studies, The Univ. of Michigan, 1976), 26-30 にも本話が採択されているが、上のいずれとも全同ではない。11頁に Soewadji Sjafei: "Pürwaçâstra" *Kitab peladjaran bahasa kawi* (Djakarta: Bhratara, 1966) から再録したものであるとあるが (Zurbuchen の表記は不正確である)、同書にはこの物語の抜粋は収録されていないので、出典は不明である。
- (51) 同じ著者にはより詳細な学位論文があるらしいが、ついに入手できなかった。
- (52) 岩井香織の第13回ことわざフォーラム全国大会 (2001年11月10日明治大学) での研究発表の折りの配付資料に含まれている。
- (53) このパーリ学者の名前は、Rhys Davids, Thomas William で登録するのが習慣である。
- (54) CJより原文に忠実な全訳である Julius Dutoit 訳を落としているのは論外であるが、仮にこれを付加し

たところで『南伝大蔵経』を初めとするアジア諸国語訳への視点が完全に欠落しているので、パーリ・ジャータカの訳のリストとしては依然不完全にとどまる。西洋語のもの追加をすれば、Hermann Oldenberg, *Reden des Buddha: Lehre, Verse, Erzählungen* (München: Kurt Wolff, 1922; Nachdr. = Spektrum 4112, Freiburg: Herder, 1993), Nr.114 = S.386-388. なお本話は収録されていないが、抜粋訳としては更に次のものがある。Джатаки: Из первой книги《Джатак》, Пер. Б. Захарьина. Москва: Худож. лит., 1979.

- (55) 文献表の記載は不十分である。Julien, Stanislas, *Les avadānas: Contes et ...* が正しい。この書はラフカディオ・ハーンによっても利用されたもので、富山大ヘルン文庫にハーンの旧蔵書が収められている。この書にまつわる問題点については、「富山ヘルン文庫の意義」『へるん』37 (2000), 78-80 で言及した。なお仏訳からの独訳もある。Die Avadanas: Indische Erzählungen und Fabeln, übers. von A. Schnell. Rostock, 1903.
- (56) Chavannes の仏典翻訳選は縮刷大蔵経に基づいているが、大正大蔵経の相当箇所を表解したものをあるのを書評家が示さなかったのは不思議である。J.W. de Jong, "CR de Chavannes, *Cinq cents contes et apologues extraits du Tripitaka chinois*," *IJ* 8 (1964/65), 240-242.
- (57) Hertel の膨大な業績群の中から二点だけしか挙がっていないが、この選択も奇妙でその基準を見出すことができない。Hertel の著作リストは次に現れている。Bruno Schindler, "Johannes Hertel," *Asia Major* 8 (1933), 1-22 mit Bild.
- (58) 筆者がかつてパーリ・ジャータカ和訳の企画に参加したことがあったが、その折り偲の平行は可能な限り蒐集し、偲の成り立ちを考慮しつつ和訳した。その作業の際には類話の蒐集も必然的に行われたのであるが、本文批判に主眼を置いたことを強調するために、類話のリストは訳註にこめなかった。干潟博士の業績があるので、屋上屋を架すことを避けた意味合いもある。
- (59) この誤った記載は2版にもあり、2版の書評をしたJ.W de Jong が *IJ* 41 (1998), 72 で指摘していることである。なおsはコンピュータのフォント変換の技術的誤りで、他のすべての長音の o が期待される場所に現れている。校正の手抜かりの責は免れ得ないが、そもそも日本語も読めないから校正すらもできないのではないか。なお初版も同じ書評家により書評されている。de Jong, *IJ* 37 (1994), 64-66.
- (60) 前述の書評で de Jong は "Dr. Grey deserves our gratitude for the enormous amount of work ..." と述べているが、対照表の構成についてもっときちんと書評すべきであった。同じ掲載誌の同じ号の "Rev. of Marion Meisig, *König Sibi und die Taube*" では、"Meisig has not only an insufficient knowledge of Chinese but is not familiar with some well-known Buddhist concepts"(pp.75-76) と得意の誹謗の言葉を並べているが、こちらは一次資料の徹底した研究であるから、いずれが学問的であるかは明かである。書評の結論が個人的な関係やムードで決定される、厳密さと公正さを欠いた書評態度がしばしば世間から批判されるのはこうしたところにあるのであろう。
- (61) 尤も全くアクセス不能であったわけではない。オーストラリア国立大学には抜粋集の方が白黒反転のマイクロフィルムになって所蔵されていたし、ニーダーザクセン州立図書館には原雑誌が所蔵されていた。しかし、前者はマイクロリーダーがものすごい粗悪品なので律蔵の翻訳の必要箇所だけしか見る気がしなかったし、後者は百年以上前のものの閲覧手続きが面倒なのでそこまでやってという程もないと思った。SOASでは自分で簡単に書架から取り出せ、コピーもできた。
- (62) Jampa Losang Panglung, *Die Erzählstoffe des Mulasarvastivada-Vinaya analysiert auf Grund der tibetischen Übersetzung* (Tokyo: The Reiyukai Library, 1981), 254 では Schiefner, Anton von と綴るが、抜粋集の著者名の欄にある von は名前の一部ではなく、「～によって」を意味する前置詞である。また

Pétersbourg の第一音節のアクセントが脱落している。

- (63) Cf. M. Manitius, *Geschichte der lateinischen Literatur des Mittelalters* III (1931), 733; B. Perry, in Pauly-Wissowa, *Real-Encyclopädie* 39 (1941), 1121.

[註 (60) への付記] 自己批判の付記をしておく。シビ王研究への書評が出た後に、Konrad Meisig から書評に対する反論が書かれ、世界の学者達に配送された。個別的事項の反論もさることながら、書評者が古い世代に属する人で、現段階の学的雰囲気からずれていることが強調され、書評者としての不適格性が指摘されていた。一読して、大部分は同感したものの、実は書評者は著者の Doktorvater であることもあり、意見を求められながらも沈黙を守ってしまった。自らが「個人的な関係やムードで」態度を決めてしまったことを敢えて記して、自戒のよすがとする。その後書評者の漢文資料の扱いがアキレス腱であることは、阿育王経に関する論文で指摘したことがある。Meisig の意見が一方向的でないことを証す傍証ともなろう。